
IS～Along with the memories～

暁晃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I S ｝ A l o n g w i t h t h e m e m o r i e s ｝

【Nコード】

N 7 4 3 2 X

【作者名】

暁晃

【あらすじ】

テンプレの神様によって『インフィニット・ストラトス』の世界へチート付きで転生させられてしまった主人公、霜月一は、自分の知る世界と違う世界で何を思い、何をするのか？この世界で何を見るのか？月はいつも、空にある。

プロローグ（前書き）

初めまして！

まずはここまで来ていただいた方に感謝します。

作者は文才ありませんが、ご期待に添えることができるよう頑張ります！

よろしく願います。

プロローグ

………ハッ！

私は、A Bの音○のように大の字で白い空間に寝ていた。

「ここは……？」

確か私は高校に登校途中だったはずだが……

脳裏を色々な考えが巡る。道で倒れて連れてこられた、今昏睡状態にあり、これは意識の中なのだ、等々。

そしてある考えが浮上した時

……「目が覚めたか？」

ふと隣を見てみると、一枚の布を纏った青年がいた。

……「青年か……お主よりは長く生きているのだがな……」

心を読まれたらしい。ここでさっきの考えが確実なものに変わった。

「私は……死んだのか？」

……「ほう、自分の現状を理解できるとは……お主、さえてるのう」

……何故か褒められた。私はそんな事は無いと思うのだが。

……「確かにお主は死んだ。だからここにいるのだ」

……いきなりそう言われても訳がわからない。貴方は何者だ、いや、あるいは……

……「そうだ。私は神だ」

……唐突にそう言われ信じる人間が何人いるのだろうか？しかし、私の考えていることと一致したので敢えてスルーさせてもらった。

……「お前が死んだのは私のミスだ。のうのと生きている殺人犯を死なせたかったのだが……名前が似ていてな。お主が死んでしまった。すまない」

……そうか、死因はなんだったのだ？

……「うむ。遙か彼方より飛んできたこんにやくの角が頭に当たって死んだのだ。すまないと思っている」

私はそんなみじめな死に方をしたのか。というよりもこんにやくの角で人間は死ぬる……のか？

……「そこで、私はお主に転生という道を提示しよう。タダとは言わん。好きなだけ能力をくれてやろう」

……私が元いた世界は……すでに死体になって無理だろう。

テンプレの神様の如くそういった神は、私が愛読している『インフイニット・ストラトス』（以下IS）の世界へ転生させてやる、と言った。

正直、ISは最新刊である7巻まで読破済みで、こういう世界には少なからず懂れていた。私も子供ということだ。
ならば……

「身体能力と技能面を軽くチートレベルにしてもらいたい。後IS

適性も高く頼む。ISは…」

私は、ガンダムXに出てくるヴァサーゴが好きである。故に、ヴァサーゴを頼んだのだが……

……「ふむ、それだけでいいなら後は私が適当に色々つけておきましょう。これでいいのか？」

なんとかとてつもなく嫌な予感がするのだが、ここでごちゃごちゃ言うのは悪いだろう。

「ありがたい。何から何まですまないな」

……「元はと言えばこちらの責任だ。遠慮しなくてもよい。ではいいか？ ゆくぞ？」

そういうと、私は薄くなっていく。

「ああ、世話になった」

……ふふふ…世話になったか。別れる訳ではないのだがな。

消える間際、そんな声が聞こえた気がした。

To be continued...

プロローグ（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。
作者は紙の心ですので、やさしくお願いします。

1話 その青年、転生（前書き）

更新しました！

プロログだけでも多くアクセスがありとても喜んでいます。

見づらい部分、表現がおかしい部分があると思いますが、やさしく見守って頂けるとありがたいです。

では、どうぞ。

1話 その青年、転生

……ハッ！

私は、見たこともない室内にいた。

体がうまく動かないが、何かに拘束されているわけでないだろう。

(……知らない天井だ……)

そう呟いたはずだった。しかし声は出なかった……

今まであったことを総動員して現在の状況を考えてみる。

私死亡↓神様↓消失↓？

……つまり今は転生した後であり、私は赤ん坊というわけか？

おそらくあそこにいる若い女性が私の母なのだろう……

とまで考えたとき、ふいにその女性がこちらへと寄ってきた。

……嫌な予感がする……

やめろ。こっちに来るんじゃない。せめて私が寝ているときにすればよからう。不意打ちはいけない。私に生き恥を晒せというのか……

……！

こうして、私、霜月一はISの世界へと転生した……

そんなこんなあり、私は6歳になった。

うむ？間はどうしたかだど？あの生き恥を晒すような日々や、特に変わり映えのしない日々を綴って欲しいのか？

とにかく、現在私は小学生である。

ちなみに、私の歳は一夏達と同じようだ。

原作キャラと遭遇することは無かった。雲を掴む様な事だったのであまり意気消沈はしていないが、物悲しさはある。

さて、これまでの私について簡単にお話ししよう。

私の今世の名前は、霜月 一（しもづき はじめ）という。

名前からも分かる通り日本人である。父、母、私という家族構成で、兄弟はいない。

神からもらった力がもう出ているのか、私は比較的早い段階で歩き始め、前世の記憶も合わさり、現在で高校レベルの問題なら普通に解けるぐらいにまでなっている。

まだISは発表どころか開発すらされていないはずだが、物心ついた時には、私の持ち物の中に金色のピアス（シャギア・フロストが原作でつけているやつ）があった。

…これはIS……なのか？

ひとまずまだこれを使ったことはない。

時期が来れば展開して練習もしなければならぬな、と思うだけである。

また、私の思いすごしでなければ、おそらく声変わり後にはシャギアのようなイケボになりそうである。

ここは神が計らってくれたのだろう。ただ感謝するのみである。

さて、私は晴れて小学一年生となったわけだが、私が所属するクラス（1-3）に、私の肝をつぶす人間がいた。コードギアスに出てくる枢木スザクの幼少期に似た人がいたのである。

名を、枢木 隼人（くるるぎ はやと）と言うらしい。単なる偶然

なのか、はたまた……

私とは違いかなり明るい人間のようなだが、不思議と出会う運命だったように思える、すぐに打ち解け、友になることができた。

この世界は私が来たことで歪んでしまったのか？何故か、そのような考えが頭を廻った。

単なる気のせいか、はたまたニュータイプとしての（？）直感なのか、どちらにしても今はまだ動けないでいるのだった………

To be continued...

1話 その青年、転生（後書き）

誤字脱字、おかしいところ等ありましたら感想にてお願いします。
次回から人物を変えながら話を進めることになりましょうか。
次回もよろしくお願いします。

2話 その青年、困惑（前書き）

更新しました！

まだ長く文を書くことができません……
おかしい所が多くあると思いますが……どうぞ。

2話 その青年、困惑

side 霜月一

衝撃の入学から一年経った。

隼人とは性格は全く違うが、どこか引き合うところがあったのだろうか、あるいは彼の魅力なのだろうか、クラスでもどこか線を引かれていた私は彼を介して少しずつクラスに馴染んでいった。

そして、事件は起こった。

私の両親が亡くなったのである。

酔っ払い運転をしていた車にひかれたのだ。

外見は幼いとはいえ、私の精神年齢は20をとうに越えている。しかし、身近な人が亡くなるという経験は初めてである。当然加害者を恨みもした。しかし、

やはり私は歪めてしまったのか？この世界を。人の運命を。

そんな考えが浮かんだ。

だとしたら、私は何のためにここにいる？

何故私は転生してしまったのだ？

答えなどどこにも無いのだろう。ただ、この頃から私は

この世界にいる意味を見出せなくなっていた：

side 枢木隼人

小学二年生の頃、親友である霜月君のお母さんとお父さんが死んでしまった。

クラスに少しずつ馴染めていった彼だけど、そのことがあってから近寄りがたい雰囲気醸し出し、徐々にクラスから孤立していった。もちろん僕は彼の親友であり続けたけどね。

彼は叔父と名乗る人に保護されたが、どうも信用できないらしく、遺産を貰いつつ一人で生活している。

……こんなになってまで、彼は普通とは言えないけど生活してたんだよね：普通できるかな？

僕は彼の親友だ。彼の力になりたい。：でも僕には彼の力になれる力がない：それだから、彼に何もできない自分にイラついた。

誰かが支えないと彼は壊れてしまう。そう思わずにはいられなかった：

side ???

”転生者達”は無事に日々を生きているようだ：

この世界がどうなり、”彼ら”はどんな道を辿るのか、そんな事は私にだってわからない。

”彼ら”の介入により、この世界にどれほど”歪む”のだろうか？
私の目的を”彼ら”は果たしてくれるのだろうか？

「……今はまだ…時ではない…」

彼は一人、笑みを浮かべた…

s i d e o u t

……そして二年後、あの事件は起きる。

彼らはその時、何を思い、何をするのだろうか？

これから始まる世界の混乱など微塵も感じさせず、時は流れてゆく
……

T o b e c o n t i n u e d . . .

2話 その青年、困惑（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。

3話 その青年、驚倒（前書き）

本日2度目の更新！

やっと長い話を書けた……それゆえ文がめちゃくちゃになってると思います……どうぞ。

3話 その青年、驚倒

side 霜月一

…両親の命日から一年が経とうとしていた。

未だ両親の他界には心に深い傷がある。おそらく一生残るのだろうな。おかげで友達と呼べる人間は隼人以外いなくなってしまった。彼はいつも私のそばにいてくれた。おそらく私を励ましたかったのだろう。いつしか私と彼の間には深い絆が生まれていた。彼がいなければ、私は…どうなっていたのだろうか。

神にもらった頭脳を使えば衣食住は難無くクリアしていたので、叔父と名乗る者（叔父なのかも知れないが、会ったことがなかったのだから）からの仕送りもあったので生活はできていた。

そんなある日のことだった。

私の机に一通の手紙があった…ちょっと待て、どこから入ったんだ？

疑問に思いながらも封を開けた。すると、

『初めまして、ではないか。この世界についての話がある。明日の

零時●●●●2階の応接室に来い』

とだけ書いてあった。

…最早怪ししかない手紙だと思う。しかし、”この世界”というワードに引っ掛かりを覚えた私は、ひとまず行ってみることにした。……存在意義は見つかるのだろうか？

指定された建物に来了。こんな建物あったらどうか？今あたりは真っ暗である。当たり前だが。なので調べようもなかった。
：うん？先客がいるな。あれが私を呼び出した人物か？
ひとまず私は応接室と書いてある部屋のドアを開け、足を踏み入れた。

そこで私が見たのは……………

枢木隼人！！？

side 枢木隼人

僕の部屋にあった謎の手紙、その指定通りに僕はこの部屋に来了。
応接室と書いてあった部屋はほんのりと明かりが灯っている程度で、3メートル先を見るのが難しい位暗い。冗談じゃないよ？

「う…………… 暗いの苦手なんだよ 早く来てよ」

誰に言うでもなくそういうと、出入り口のドアが開いた。（怖いので閉めていた。作者がそうだったので間違いない）

やっと来了！まだ零時にはなって無いけど早く来てくれるなら何でもいいや！

そう思って振り向いた。

「……………え？」

そこで僕が見たのは、僕の唯一無二の親友である、

霜月一君であった。

side 霜月一

何故隼人がここにいる？彼が呼んだにしては様子がおかしい。あっちも予期していなかったようだ。

霜「どうして…君が…？」

隼「どうして霜月君が…？」

やはり向こうも驚いているようだ。と、困惑している間に、時計の針は零時を指した。

その時、虚空から声がした。

？「お、二人とも来てくれたのか。特に霜月は来ないかと思っていたが」

霜・隼「！！！！」

声がした方を見ると、何故かあったクローゼットを背にし、黒いスーツを着た青年が立っていた。

？「ふむ、まあ立ち話もなんだ、来たまえ」

そう言うと、青年はクローゼットを指差した。

霜「…は？」

私のこの対応は当たり前だったと言えよう。クローゼットを指差して来いと言っているのだから。

？「何をしている？早く来なさい」

言うなりクローゼットの戸を開け、”入って”行った。

何なんだ？さっきからおかしな事ばかりではないか。私がこの世界に転生したのはそこまで影響力が…
ふと、あの手紙の分が頭をよぎった。

『この世界について話がある』

私は意を決してクローゼットの中に飛び込んだ！

………うん？私はさっきまでコンクリートむき出しのビルにいたはずだが……

今私がいるのは、まるで未来都市のようなビルの中にいた。
隣には隼人がいる。あいつもここに来れたのか。と、突然壁から（
？）声がした。

「シモヅキ様とクルルギ様ですね。前の部屋にお入りください。」

もうこうなればヤケである。私はその扉を開け、その部屋に入った。隼人も恐る恐るついて来ているようだ。

？「久しぶりだな。霜月一、柘木隼人」

そこにはさっきの黒スーツの青年が社長椅子みたいな物に座っていた。

霜「私たちを知っているのか？お前は誰だ？」

声が震えているな、柘木に関しては筋肉がつきそうな位足を震わせている。

？「忘れたか？私は、神だ」

.....

時が止まったような気がした。
いきなり何を言っているんだ？この目の前の奴は。

？「む、信じないのか？●●●、柘隼人」

……今こいつは何と言った？●●●●●は私の前の名前ではないか？
さて、柘隼人というのは……もしかして……

隼「……何故貴様が俺の前世の名前を知っている？」

……さて、こいつは何と言った？というかこんな口調で話すのを聞くのは初めてだ……

？「だからそれが私が君たちを転生させた神だという証拠にならないか？自分が転生者だということは自身以外誰も知らないはずだろう？」

……さっきから訳が分からない。確かに私は転生者で私以外は誰も知らないはずだ。

では隼人も…転生者なのか？

霜・隼「お前は…転生者なのか？」

何ということだ。見事にハモったじゃないか。

？「さて、なんなら君たちの死因も言ってやろうか？」

霜「……分かった。貴方があの神ということは認めよう。で、今はどういう状況なんだ？何故私と隼人は呼ばれたんだ？ここはどこなんだ？何が望みだ？何が…」

私にしては珍しく動揺していた。当たり前か、こんな状況下では気がおかしくなりそうだ。

神「質問は一つずつにしてほしいものだな。まずは自己紹介というか」

霜「何を…」

神「神では外界で呼べないだろう。私の事は…」

クワトロ・ポイボス

と名付けよう。クワトロとでも呼んでくれ。そしてここは、

”月面都市 フォン・ブラウン”だ」

……さて、ここは月なのか？どうしてただのクローゼットが月と繋がっている？

ク「今何故クローゼットとここが繋がっているかと思ったな？後にISという兵器ができるんだが、それに使われている量子変換システムを少し応用したまでだ。早い話がご都合主義というわけだ」

…最早突っ込む気力もない。隼人は隣で固まっている。

ク「私はこの都市全体の長だ。まあこの都市丸々1つの企業なのだが。さて、望みだったな…と、聞いているか？」

隼人はようやくとフリーズから解除された。そしてクワトロから告げられたのは

ク「この世界には君たちが来たことで多くの歪みが発生している。その排除が私の望みだ」

…やはり歪んでいたのか…

ク「君たちにはこの都市の一員としてここに住んでもらいたい。もちろんここから地球にも例のシステムで往復できるし、悪いようにはしない」

なるほど。それに私の存在価値私の存在価値があるのなら…

霜「私はその話に乗らせてもらう。だが、隼人には親がいるぞ？親ごとここに連れてくるのか？」

隼「ッ！！！！君に言っていなかったが、俺は半年前、親に捨てられたんだ。だから連れてくる奴なんていない」

…こいつもこいつでとんでもない事を言う…

隼「クワトロ、その話、俺も乗らせてもらう」

ク「そうか…なら住居等は追々話そう。本題に入りたいのだが、いいか？」

…隼人のこと、これからのことは後で考えよう。

クワトロは、深くイスに座ると机に両肘をつき顔の前で手を組み、鋭い眼差しで霜月達を見、告げた。

ク「霜月は知っていると思うが、後一年後にISというマシンが開発され、日本に二三四一発のミサイルが撃ち込まれる」

…隣で隼人が息をのんでいるのが分かった。隼人はISについて知らないのか？

『白騎士事件』――

東博士がISを発表してから一ヶ月後、全世界のミサイルが日本に向かって発射された事件である。

これには東博士が発表したIS、通称『白騎士』がこれを駆逐、続いてきた軍隊を無力化させ、世界にISの圧倒的な戦力差を証明させた事件である。

ク「その事件で『白騎士』というISがミサイルを駆逐するわけだが、『白騎士』が斬ったミサイルは一二二一発、表には全部落とされたことになっているが…」

霜「後残りの一二〇発のミサイルは本当は落ちた、と言いたいか？」

隼「なっ!! そんなことが起こるのか!？」

ク「まあ枢木は知識がないから知らないかもしれないが、落ちたと私は考えている。故に、だ」

そこでクワトロは深く息を吐き、低い声で、告げた。

ク「君たちは、そのミサイルを全て落として欲しい」

T o b e c o n t i n u e d . . .

3話 その青年、驚倒（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。
やっとなしだけ原作に介入できる……

4話 その青年、始動（前書き）

更新しました！

今回で原作に微介入するつもりだったのですが…次回で介入します。
相変わらず長い文ではありませんが…どうぞ。

4話 その青年、始動

side 霜月一

あの後、私と隼人はフォンブラウン第四区にある住居に住むことになり、正式にフォンブラウン社の所属員となった。

資金、物資等はクワトロ（以下社長と敬称をつける）から送られてくる分があるので、叔父とは手を切った。

私の机にあったあのピアス、やはりISのようだ。しかも何故か一次移行は済んでいた。

私の機体は ” ガンダムヴァサーゴcb ” である。二次移行したらどうなるんだ？

隼人はやはり転生者のようで、あの神に「ロボット物だ」と言われ、コードギアスだと直感したらしい、何の迷いもなく「枢木スザクにしてくれ」と言ったらしい。

残念ながらこの世界は『IS』である。少し間の抜けているところがあるが、基本かなりいいやつで、社交性では負けるだろう。

何より、私よりも知能が低い分、身体能力が馬鹿らしく高い。道理で私が運動方面で勝てないわけだ。

彼の機体は ” ランスロット・アルビオン ” である。こちらも一次移行済みである。

彼は前世では槍を持つ機会が多かったらしく、剣の扱いが苦手（良い意味で人間のレベルでは無い）らしい。

……さて、こいつの前世はなんだったんだ？

私は、第二区にあるIS第16アリーナで練習をしていた。隼人も

どこかでやっているのだろう。

地球には第八区にある転送ゲートから行ける。外観は飛行場のようである。

私がフォン・ブラウンで驚いたことが、この都市にはかなりの人間が住んでいるということだ。

その人間がどこから来たのか、何故こんな所に居るのかは答えてくれなかったし、あまり興味も無かった。

そんな常識とかけ離れた日常を過ごし、約1年が過ぎた。とうとうこの時がやってきたのである。

一か月前に無名の博士が『IS』なる兵器を開発、発表したのである。

この瞬間、私と隼人というイレギュラーを抱えた世界は、動き出した。

side 枢木隼人

ちょうど一週間前だろうか？社長から、地球に”その時”が来るまで霜月と待機している、という指示が来た。

霜月君もこれからの展開を知っているようで、妙に落ち着いていない。

僕はといえば、本当に三三四一発のミサイルが来るなんて思っていなかった。

世界中の軍事機関にハッキングをする能力を持つ人間なんて、普通いないと思っていた。霜月君は出来ると言っていたけど、普通じゃないもんね。

そう、僕は今この時、指定されたポイントで待機しているこの時も、そのニュースが来るまで信じてはいなかった。

———全世界のミサイル、計三三四一発が日本に向けて放たれたという情報が知らされた。

何故が予定よりも多い。これは僕たちがこの世界に来た事による歪みなんだろうか？

だったら………やってやるさ。

俺のランスロットと、霜月のヴァサーゴで、すべて駆逐するまでだ！

side 霜月一

今さっき、ミサイル三三四一発がこのあたりに飛んでくるという情報が社長よりもたらされた。

三三四一？何故そんなに多いのだろうか？これも歪みなのか？

隼人はなんだかそわそわしている。早く自分の実力を試したいのだろう。目立ちたがり屋め。

とか言う私も少し興奮していたりする。このヴァサーゴがどのくら

い出来るのか、試してみたい。

……ふと向こうの空より”人”が飛んできた。おそらくあれが白騎士なのだろう。

さて、そろそろか……？

「クワトロより各員へ！これよりミッションを開始する！総員の健闘を祈る！」

隼「オーライ！枢木隼人！行くぜー！……！！！！！」

霜「了解した。霜月一、出る！」

こうして後に【白騎士】と呼ばれることになる機体と謎の二機との、ミサイル殲滅戦が始まった……

T o b e c o n t i n u e d . . .

4話 その青年、始動（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。
次回、初の戦闘描写です！ひどいと思いますが……

5話 その青年、介入（前書き）

本日二度目の更新！

書いてて思った。あれ…戦闘描写は？

やはりIS同士の戦闘でなくてはね！うん！

…失礼しました。では、どうぞ。

5話 その青年、介入

side 白騎士

東に白騎士のパイロットにさせられ、ミサイルを落としに来た私だったが、目標地点に来た時、下から謎の機体反応があった。

…馬鹿な！？この白騎士の、ISのセンサーに反応は無かったぞ！？どうやって隠れていたというんだ！？

とその時、白い機体が背中から二本の棒が出たかと思うと、そこから緑色の羽を出し、あり得ない数のエネルギー弾をミサイルの群れに向けて発射し、自身も突っ込んでいた。

…もう訳がわからない…あれもISなのか？

私は、ミサイルを落とすということも忘れて、愕然としていた。

side 霜月一

千冬さんは何もしてくれないのか？…って目の前でこんな事されたら呆然としてしまうか。

さて、私も準備をしよう。

私は、ヴァサーゴの腹部を割り、胸部装甲を展開させ、6枚の羽根を全開にさせた。

side 枢木隼人

俺はミサイルを順調に落としていた。

ある時はスーパードアリスのハドロン砲でまとめて破壊し、ある時はスラッシュハーケンで落としつつも剣で擦れ違い様に切断、またある時はエナジーウイングから粒子を射出、確実に落としていった。

その時、後に膨大な熱量を感知した。

霜月が”あれ”を使うのか…なら俺も後ろで待機だな。

隼「おい！そのパイロット！聞こえてるか！？今から俺とあいつはチャージに入る！ミサイルを落としてくれ！」

そして俺は、あいつとタイミングを合わせるために後ろに下がった。白騎士とか言うやつは俺の指示に従ったのだろう、ミサイルを落とす前に出た。

霜へチャージが完了した。いくぞ

隼へあいよ！待ってました！

そうして俺は、スーパードアリスのフルバースト、エナジーウイングのエネルギー弾を一斉に発射した。

side 霜月一

霜へチャージが完了した。いくぞ

隼へあいよ！待ってました！

隼人の健闘のおかげか、この短時間で空域のミサイルは三分の二ぐらいになった。

私も頑張らなくてはいいけませんね。

露「大地を見ぬまま地獄へ堕ちろ」

私は、ミサイルの群れに向かってトリプルメガソニック砲を放った。

side out

この後、攻勢にでた霜月の活躍もあり、ミサイル三三四一発は一つ残らず落とされた。

後に『白騎士事件』と呼ばれるこの事件は、後に来た軍を白騎士が完全制圧。死者0という行為を容易く成し遂げ、世界にISという兵器の圧倒的な戦力を思い知らせた。

ちなみにヴァサーゴとランスロットはミサイル全撃破後、戦線から海中へで離脱。誰の目にも触れることはなかった。

しかし、ただ一人、白騎士の搭乗者、織斑千冬はあの機体を忘れることはなかった。

そして六年後、彼女はそのISらに再び会うことになる。

序章く物語の始まる前く THE END

TO BE CONTINUED!

5話 その青年、介入（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。
次回から原作に入ります。

オリジナル設定（前書き）

ネタばれがある…かも。

飛ばして頂いて一向に構わないので…

10／24機体設定更新

10／25機体設定更新

11／08大幅更新

11／28微編集

オリジナル設定

オリジナル設定

霜月 一しやづき はじめ

CV・森川智之

所属…フォンブラウン社

身長…185cm

専用機

ガンダムヴァサゴ

一次移行 ガンダムヴァサゴcb

二次移行 ガンダムクロケル

備考

この物語の主人公。

神により、ISの世界に転生した一人。

年齢に釣り合わぬ雰囲気醸し出している。

幼い頃に両親を亡くし、自身の存在意義を見失っているが、歪みを駆逐するという目的で自身の存在意義を保っていた。現在は簪を守るといふ想いを意義としている。

前世ではアニメやゲームを好み、隼人とよく談議をしている。IS適性はSランク

転生条件は身体能力と技能のチート化、シャギア・フロストとしての能力

追記

更識さらしき 簪かんざし

専用機

斬鉄

霜月に惚れてしまった事により、原作軸から大きく外れてしまった。霜月やフォン・ブラウン社の助けもあり、自身のISを開発した。

現在はフォン・ブラウン居住権を持っているが、自宅をつくらず霜月の家で生活している。しかし、フォン・ブラウンに来ることは霜月に呼ばれた時以外無い。

寮にルームメイトが居るためである。

霜月とは相思相愛だが、多少ぎこちない。

これは作者に恋愛経験が無い為である。ごめんなさい。

枢木くるもぎ 隼人はやと

CV. 櫻井孝宏

所属..フォンブラウン社

身長..176cm

専用機

ランスロット

一次移行 ランスロット・アルビオン

二次移行 ランスロット・トリトン

備考

神によりISの世界に転生した一人。

枢木スザクそっくりだが、これはロボット物と神に言われ、枢木スザクを求めた結果である。

頭脳は転生者の中では低い方だが、身体能力は霜月を上回り、高水準である。

性格は前向き&脳天気。とりあえず突っ込んでいくタイプである。前世ではアニメやゲームを好み、霜月とよく談議をしている。ISランクはSだが、霜月に少し劣る。

転生条件は身体能力の最強、枢木スザクとしての能力。

余談だが、最近影が薄い。

クワトロ・ポイボス（神）

所属…フォンブラウン社

身長…不明

使用IS

移行度不明 0

備考

霜月や枢木など、多くの人間を転生させてきた神であり、フォンブラウン社の社長、都市フォン・ブラウンの永久大統領である。

神としては、犯罪者を裁き、来世で罪を償わせる事が仕事である。しかし、たまに間違えてしまう事もあり、案外軽薄である。迷惑この上ない。

進藤 真人 しんどう まひと

所属…フォンブラウン社
身長…正確な値は不明

備考

フォンブラウン社副社長。

その正体はクアトロが最初に転生させた者であるが、実は元から普通の人間ではない（この物語では語られない）。身体能力、知力ともに最高峰であるが、言動が少しキツイ。しかし根は良い者である。

転生条件は幻想を再現する能力。

オリIS設定

ガンダムヴァサールゴ

全身装甲

搭乗者 霜月一

第一形態

ガンダムヴァサーゴc b

第二形態

ガンダムクローケル

装備（c b時）

基本装備へプリセットへ

ストライククロー×2

クロービーム砲×2

トリプルメガソニック砲

後付装備へイコライザへ

ストライクシューター×2

装備（クローケル時）

基本装備へプリセットへ

ストライククロー×2↓ストライクビームクロー×2

クロービーム砲×2

トリプルメガソニック砲

ツインサテライトキャノン

ガンダムアローケル

サテライトランチャー

(ガンダムアローケル接続時)

後付装備へイコライザ

ストライクシューター×2

正宗

PーGビット

単一仕様能力へワンオフ・アビリティ

リミッター解除

備考

霜月一の専用機。

神より授かった機体であり、ガンダムヴァサールゴをモデルに造られている。

リミッター解除などの搭乗者を考えていない設計ではあるが、強力なステレスシステムやフラッシュシステム受信機、ニュータイプ能力を高める機能も有している。

ランスロット

搭乗者 枢木隼人

全身装甲

第一形態

ランスロット・アルビオン

第二形態

ランスロット・トリトン

装備（アルビオン時）

基本装備（プリセット）

メザールバイブレーションソード×2

スラッシュハーケン×4

エナジーウイング（6枚羽）

後付装備へイコライザ

スーパードアリス×2

その他

ランドスピナー×2

装備（トリトン時）

基本装備へプリセット

メザバイブレーションソード×2↓ビームトライデント

スラッシュハーケン×6

エナジーウイング（8枚羽）

後付装備へイコライザ

スーパードアリス改×2

単一仕様能力へワンオフ・アビリティー

バーサーカーシステム

備考

枢木隼人の専用機。

神より授かった機体であり、ランスロットをモデルに造られている。

ガンダムクローケルと同じく、バーサーカーシステムという搭乗者を考えていないシステムを搭載しているが、隼人の特性を最大限に発揮すべく高い機動性と高威力の武装を有している。

0（ゼロ）

全身装甲

搭乗者…クアトロ・ポイボス

移行度不明

標準装備不明

単一能力

月光蝶

備考

全てが謎に包まれた機体。

そもそも使う機会が無いのでどのような装備が有るのかも分からない。

月光蝶は《破壊》、《再生》、《攻撃》、《防御》など様々な機能を有しているらしい。

また、移動手段としての量子化に成功していて、一瞬で大気圏の離脱、突入が出来る。

斬鉄ざんてつ

搭乗者 更識簪

移行後の名前変更無し

基本装備〈プリセット〉

斬鉄

山嵐

春雷×2

後付装備〈イコライザ〉

インコム×2

単一能力〈ワンオフアビリティ〉

不明

備考

簪の専用機。

霜月が簪の為に作らせた機体で、量産型四世代ISをカスタマイズした機体である。

ビームを纏う薙刀『斬鉄』や、収束、拡散可能の巨大ビーム砲『春雷』、マルチロックオンを搭載した10門×10発のミサイル『山嵐』、非ニュータイプ用試験型遠隔操作武器『インコム』など、高出力武装がありつつもかなり燃費が良い。

また、展開装甲も標準装備されており、機動性も高い。

オリBIS設定

BISとは、BitterISの略であり、主に霜月が使う。高い並行処理能力が必要で、特殊な能力を持つニュータイプしか動かすことは出来ない。

しかし、高いニュータイプ能力を持つ者はかなり制御をする事が出

来る。

ガンダムクローケルの持つフラッシュシステム受信機がある機体でないと動かせない。

ガンダムアローケル

装備

ギガンティックビームシザース×2

シザースビームキャノン×2

サテライトランチャー

(ガンダムクローケル接続時)

備考

ガンダムクローケルに最初から搭載されていたB I S。外見はM A 時のガンダムアシュタロンH Cである。

後のGビットに技術が生かされ、B I Sの基盤を作った。

普通のB I Sとは一線を画した姿をしており、性能はとても高く、展開装甲搭載機と比べスピードが段違いである。

当機はクローケルの補佐を目的とした機体であり、クローケルを上に乗せての高速飛行、単独での支援など幅広く活躍出来る。また、クローケルと接続する事により、サテライトランチャーを撃つことも出来る。

両腕のギガンティックビームシザーはISの腕を握り潰す程の威力があり、主に敵機の拘束に使う。

PーGビット（プロトタイプーGビット）

装備

ビームサーベル

ビームライフル

試験型サテライトキャノン

備考

フォンブラウン社が最初に開発したBIS。

試験機なので性能や汎用性も低い。サテライトキャノンも親機からエネルギーを流すので、実戦ではまず使えない。学年別トーナメントの時、ガンダムクローケルに6機配備されたが、いずれもランスロット・トリトンに撃破されている。

月面都市 フォン・ブラウン設定

月面にある都市。

クワトロが創設、フォンブラウン社の本社であるが、都市としての機能性も十分にある。

一つのクレーターをそのまま使い、面積は東京都23区よりも少し

小さい位である。

町全体にシールドや迎撃砲があり、隕石などを防ぐことができる。

都市の形は円形で、本社のある第零区を中心として第八区までである。
(ピザを切り分けたような形)

第零区：フォンブラウン本社、フォン・ブラウンの管理施設、マイクロウェーブ送信施設など、非常に重要な施設がある区間。

第一区：人々の精神の安定を目的とした区間。

主に娯楽場がある。宇宙で自然を見かけることはないので、地球に見たてた自然公園もあるが、そこは地球よりもきれいだである。機械で管理されている事が少し残念ではある。

スポーツ場や図書館、どうなっているのかはわからないが地球の電波を受信しているTV、ネットも使用可能であり、息抜きには最適の場所である。

第二区：ISなどの兵器運用を目的とした区間。

シュミレータ施設や、ISのアーリーナが数多くあり、フォン・ブラウンの中で最も面積を有している区間でもある。アーリーナの実に20を超え、野外での戦闘や高出力兵器の運用を目的としたアーリーナなど、多様なバリエーションがあり、隣の区間が娯楽施設なので、訓練に適している場所と言える。

第三区：兵器開発、研究を目的とした施設がある区間。

隣の運用施設とマッチングしており、データがリアルタイムで送られてくる。

当施設には独立型マルチAI「ハロ」が複数配備されており、高速演算、修理、データ管理など、幅広い分野で活躍している。

ISの後付装備〈エイラコイザ〉もここで開発が可能である。

第四区、第六区：居住区。

推して名の通り、住む区間である。

間に商業区を挟み、電車に加えてバスなど交通機関が最も発展しているところであり、人が生活しやすい設計になっている。

この都市には何故か多くの人が住んでいるが、それでもまだ住居はかなり余裕があるらしい。

第五区：商業区

食料品や生活雑貨に衣服など、ポケットティッシュから家まで何でもそろっている。流石に兵器はないが。

すべてフォンブラウン社の製品であり、どれも地球の文明を超えている。

第七区：外（地球）から来た人を迎える区間。

高度文明は欠片も見られず、ほとんど地球の文明と同じであるが、第七区の周りには高い壁があり、兵器の働きを妨害するシステムなど、情報の漏えい防止にとっても気を使っている。

フォン・ブラウンの住人は、事前に血液中にナノマシンを投与され、それにより区間内の転送ゲートより中に入ることができる。フォン・ブラウンの中では最も面積が小さい。

第八区：地球への転送ゲートがある区間。

主に座標指定で地上へと降りる。地上でやることのある人は多くないので、あまり多くは利用されていない。

なお、各区間は列車のようなものが地下に通っていて、自由に区間を行き来できる。

第七区には駅などがない。これは情報の漏えいを防ぐためである。

6話 その青年、入学（前書き）

更新しました！

PV5000，ユニーク1000人突破しました！ありがとうございます！

やっと学園転入です。今回はいつもと比べて少し長め。

文が変なところがあると思いますが…どうぞ。

6話 その青年、入学

白騎士事件から六年後……

ISが世界を左右する存在になった事で、大きく世界は変わった。

その一つとして、女尊男卑は良い例だろう。

ISは、理由は不明だが女性しか動かす事が出来ない。

ISが世界の法となっている今の世なら、そうなるのは必然であるといえる。

だから、このニュースは世界を震撼させた。

『世界で唯一ISを使える男が現れた』

だが、事態はこれだけに止まらなかった。

世界で二人目、三人目が現れたのである。

世界は、新たな混乱に見舞われた……

side 枢木隼人

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

黒板の前でにっこりと微笑む女性副担任こと山田……何て言ったっけ？

兎に角、山田先生はそう言った。

あの人は本当に先生なのかな？

僕には背伸びしています感があるように見える。僕だけ？

山「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

……しーん………

誰からも返事がない。教室は変な緊張感に包まれていた。

山田先生はうろたえながら自己紹介を求めている。

僕はそんな山田先生を横目で見ながら、霜月君に視線を送った。

霜月君はこうなることも知ってるだろうし、これからの事も知っている。

この物語の知識がない僕にはわからない。

と、一番前にいる男子が窓側に視線を送った。

霜月君いわく、あれは織斑君と篠ノ之さんの感動の再会のシーンなんだとか。

…とてもそんな風には見えないな…

山「織斑くん。織斑くん。」

一夏「は、はいっ!？」

織斑君が山田先生に呼ばれた。何か考えていたのだろう、声がひっくり返っていた。

あゝあ、周りに笑われてるよ。

山田先生がペコペコ謝ったり、織斑君が後ろを向いてたじろいだりした。

一夏「えー…えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします。」

…それだけ？

教室内の視線がプレッシャーに変わる。

霜月君が驚いている。どうしてだろう？

と、

一夏「…以上です」

本当にそれだけだったみたいだ。女子が何人か椅子から落ちたぞ。

と、僕は物凄い威圧感を感じた。僕や霜月君は大丈夫だけど、明らかに普通の人のそれを超えている。

その時、

パアンツ！

織斑君が叩かれた。

その人というのが、

一夏「げえっ、関羽！」

バアンツ！

出席簿から出したとは思えない音が響いた。

？「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

…織斑くんの机に少しヒビが入っていた。生きているのだろうか。

山田「織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

織斑「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

山田「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

織斑先生の口調が変わった。凄い変わりようだ。

織斑千冬…

確かあの白騎士に乗っていた……

そこまで考えたとき、霜月君にアイコンタクトをされた。

〔耳を塞げ〕

どういふことだろう？ひとまず耳を塞いだ。すると、

「キヤーーーーーー！！！」

…ビリビリビリビリ……

突如、ソニックブームが巻き起こった。

耳を塞いでいなかったら即死だった……

……その後も自己紹介はつつがなく行われた。

今は『く』。僕の番だ。

隼「初めまして。フォンブラウン社に所属しています、枢木隼人です。好きな言葉は友情。嫌いな事は他人を卑下すること、またはする人です。よろしく願います」

そう僕は笑顔で言った。うん？また霜月君からだ。

「耳を塞げ」

そして塞いだ瞬間ソニックブームが巻き起こったのは言うまでもない。

そして霜月君の番がきた。

霜「初めまして。フォンブラウン社所属、霜月一だ。特に好きな事などは無いが、気兼ねなく接してほしい。よろしく頼む」

その後ソニックブーム（以下略）

こうして自己紹介は窓ガラス三枚を犠牲にして終わった。

side 霜月一

一時間目の授業が終わって今は休み時間である。

私は隼人と前世でのゲームについて論を交わしていた。

一夏「ちょっといいか？」

一夏がこちらに近づいてきて、話しかけてきた。

霜「何だ？」

一夏「お前らが後二人の男子だよな。俺は織斑一夏。同じ男同士、仲良くやっていこうぜ」

霜「ああ、よろしく頼む」

隼「よろしくね。織斑君

」

そう言って、握手を交わす

。

一夏「俺の事は一夏で構わない」

霜「そうか。では私の事も一でいい」

隼「僕も隼人でいいよ」

一夏「そっか。よろしくな。一、隼人」

余程これまでのプレッシャーがキツかったのだろう。初めて安堵した表情になった。

？「ちょっといいか？」

霜「うん？」

そこにいたのは篠ノ之箒だった。ああ、感動の再会をするのか。

箒「少しこいつを借りたいのだからいいか？」

霜「構わない」

隼「いいよ」

そう言うなり、箒は一夏の手を握り、教室の外へでた。

私と隼人は、再び雑談に戻った。

二時間目は、一夏が参考書を捨てたとか、そんな事があった。このあたりは原作通りか。

休み時間、一夏は一人、金髪貴族に絡まれていた。私達の所に来なかったのは時間がなかったからだろう。嬉しい事この上ない。

三時間目、織斑先生によりクラス代表を決める（一方的な）話し合いが行われた。

真っ先に名前が挙がったのが一夏、私と隼人は名前が挙がらなかった。原作通りに進むのだろうか。だとしたらありがた………

一夏「なら俺は一を推薦するぞ！」

…前言撤回。世界は優しくは出来ていないらしい。

とその時、代表候補生のエリート（笑）が怒りをあらわにした。大まかに言うと、恥さらしがどうだの、極東の猿がどうだの、文化が後進的だの、そんなようなことを叫んでいた。実際は、その極東の猿がISを開発したのだから。

これにより、一夏、ついでに隼人がキレた。面倒事はごめんのだが、しょうがないか。

一夏「イギリスだってたいしたお国自慢無いだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

隼「昔にすぎりついてるだけの小さい孤島の猿が、何を喚いているのやら」

セ「あっ、あなたたちねえ！私の祖国を侮辱しますの！？」

霜「初めに侮辱したのはそちらだろう。言語をちゃんと理解したう

えで生きていかなければならないぞ？」

セ「ぐっ……！ぬぬぬぬぬ！決闘ですわ！！」

一夏「おう、いいぜ。四の五言うより分かりやすい」

隼「はあ、雑魚を相手にしなきゃいけないなんて、めんどくさいなあ……」

霜「だったら、総当たりも面倒だ、トーナメント形式にしないか私と隼人、一夏とオルコットで戦えばいい。それで文句無いか？」

セ「ええ、いいですわ。だれが勝つのかなって目に見えてますもの」

織斑「話はまとまったな？それでは一週間後の月曜日、第三アリーナで勝負を行う。各員準備しておくように。それでは授業を始める」

つい言ってしまったが、隼人とは数年ぶりに戦うことになる。これは少し楽しみになってきたな。

放課後、山田先生から寮の部屋の番号を伝えられた。神聖なるバトル（じゃんけん）の末、一夏は1025室、私と隼人は1026室になった。どうせフォン・ブラウンに小型端末を用いて帰るから必要ないのだが。一夏は原作通り、1025室で波乱の生活を送るのだろう。私の知ったことではないがな。

私と隼人は帰宅するなりフォン・ブラウンへ帰還、自身の機体を調節したりしながら一週間を過ごした。

そして月曜日、第三アリーナで勝負が行われた……………

To
be
con-
tin-
ued.
.

6話 その青年、入学（後書き）

誤字脱字、おかしな所等ありましたら、感想にてお願いします。
次回は戦闘！うまく戦闘描写が書けるよう努力します。

7話 その青年、出撃（前書き）

更新しました！

戦闘描写のはずだったのに…どうしてこうなった？
滅茶苦茶ですが…どうぞ。

7話 その青年、出撃

side 霜月一

今私はアリーナのゲートにいる。

原作通りなのだが、やはり一夏はずっと剣を振っていたらしい。改めてみると、馬鹿である。

その後、一夏のIS『白式』が来て、一夏は空へ飛んで……押し出された。

原作通りなので割愛

織斑「馬鹿者」

箒「馬鹿だな」

霜「バカだ」

帰還早々フルボッコにされた一夏はその場に倒れ込んでしまった。
ISの絶対防御でも防げなかったらしい。

…さて、次は私の番だな。

（来い、クローケル。）

私が意識するのとISが展開するのはほぼ同時である。伊達に七年も使っていない。

ガンダムクローケル

ガンダムヴァサゴの第二形態であり、これまでの武装に追加してツインサテライトキャノンがついている。

だが、これは最低出力でもISの絶対防御を貫いてしまうので使えない。学園内で使ったらここは無くなってしまいうだろう。正直、邪魔である。

後は後付装備として長さがISの二倍を誇る『正宗』、ストライククローがストライクビームクローになった。

これを展開したとき、織斑先生の顔に驚愕の色が浮かんた。が、そんな事はどうでもいい。

霜「霜月、クローケル、出る！」

私はバレルロール上昇をし、隼人の元に降り立った。

隼人のISはランスロット・トリトン。

ヴァサーゴと同じく、ランスロットの第二形態である。

メザールバイブレーションソードが無くなり、変わりにビームトライデントになった。

ハイパーヴァリスは新たにミドルモードとショットモードが加えられた。

ミドルモードは連射に優れ、ショットモードはビームを撒き散らす事が出来る。

エナジーウイングの羽の枚数や、スラッシュハーケンも増えており、戦略に幅がでたが、いかなせん隼人は猪突猛进型で戦略というものを知らない。

隼「悪いが勝たせて貰う」

霜「軽口は私に勝てるようになってから言うのだな」

隼「もうあんたには負けない」

霜「フツ…では再び、絶望を贈ろう」

隼人はビームトライデントを、霜月は正宗を頭上で構える独特な型で構える。

山田「それでは初めて下さい！」

始まりのブザーが鳴った。

side out

……開始から3分後……

一夏「どうして二人とも動かないんだ？」

織斑「互いに牽制しあっているんだ。篠ノ之なら二人の間で行われる戦いがわかるだろう？」

箒「はい……凄い殺気がするのがわかります。あの二人は一体……」

千冬は考えていた。

（あの赤い機体と白い機体……あの時の機体にそっくりだ……偶然なのか？）

しばらくした後、隼人がビームトライデントを構え、突進した。

霜月はそれを正宗で弾き、返す刀で隼人に太刀を浴びせた。その速さは凄まじく、千冬の目にも捉える事が出来なかった。

織斑（なっ！！私の目で太刀筋が追えない！！何なんだ？あのスピードは！）

霜「フッ！」

正宗を一閃、衝撃波が隼人を吹き飛ばした。

隼人は体勢を立て直したが、直ぐに連撃を浴びる。

試合は一方的に行われるかと思われた。

だが、隼人は徐々に刃を弾き始め、鏢（？）迫り合いになった。

霜「ほう？何がお前を強くした？」

霜月の質問に隼人は意図を察したようで、

隼「あんたには言いたくないね！」

そのやり取りが面白かったのか、二人は笑った。ちなみにこの間も不可視の斬撃は続いており、隼人はそれを弾いている。

霜「だが、遊びはここまでだ」

〈八刀一閃〉

霜月が使うその剣技は不可視の斬撃から一転、凄まじいパワーの斬撃のラッシュへと変わる。

そして八刀目、

霜「終わりだ」

一閃。

強制的に絶対防御を発動させ、そのままシールドエネルギーを0にする。

山田「し、終了！勝者、霜月一！」

試合時間はおよそ10分。

状況が理解出来ない者、呆然としている者、反応は様々だったが、

アリーナは、静寂に包まれていた。

side 霜月一

次はセシリアか……

面倒だな。適当に終わらせるか。

セシリアがこちらに降りてきた。

セ「…あなたに勝とうとは思いません、でも、健闘はさせてもらいますわ」

霜「ほう…一夏と戦い、学んだか。」

まあ、原作通りだな。

山田「両者準備は良いですね？では、始めてください！」

開始のブザーが鳴った。

セ「踊りなさい！私とブルーティアーズが奏でる円舞「邪魔だ」…え？」

私は正宗を一閃、衝撃波でビットを全て落とした。

霜「悪いが、直ぐに終わらせる」

直後、ヴァサーゴは、アリーナにいる全員の視界から消えた。

セ「なっ！ISのセンサーでも見つからない！一体どこに…」

突如、上から声がした。

霜「残念だが、サヨナラだ」

〈獄門〉

霜月はセシリアの上から、正宗を下に構え急降下。ブルーティアーズの絶対防御を発動させその勢いのまま落下。アリーナにクレータ―作った。

山田「……………はっ！勝者、霜月一！」

その日、会場が沸くことはなかった…

その後第三アリーナの修理をしたのは私である。はあ、面倒臭かった…

——試合後——

織斑「霜月、枢木、話がある。ちょっと来い」

霜 隼「…わかりました」

私と隼人は織斑先生に呼び出された。休ませてくれてもいいのではないか？本当に面倒事が続く…

side 織斑千冬

霜月と隼人は何者なんだ？

あの試合で霜月は強力なステレスシステムを使っていた。それこそ全てのセンサーに引っかからない強さである。

織斑「単刀直入に聞く。霜月、隼人、お前たちは何者だ？」

霜「どういう意味ですか？私はフォンブラウン社所属の霜月一、それ以上でもそれ以下でもありませんが？」

隼「僕も霜月君と同じですね。ただのしがない高校生です」

織斑「何を隠している…？」

霜「人とは常に何かを隠しているものですよ。お先に失礼します。」

霜月は、そう言って去っていった。

隼「…あの時僕の指示に従って頂きありがとうございました。お陰で効率よくミサイルを落とすことが出来ましたよ…では、失礼します」

織斑「!!!!!! おい待て!!!! どういう事だ!?!」

……既にそこには誰もいなかった。

奴らは…何者なんだ…

side 霜月一

山田「…と言うことで、クラス代表は織斑君に決まりました」

どうやら原作通りに事は進むようだ。

私は辞退、恐らくセシリアも辞退だろう。隼人は元から選ばれていない。

一夏「あの…俺負けたんですけど…」

霜「私が辞退したからな」

セ「私も辞退致しましたわ。」

その後もセシリアがなんか言っていたが割愛させていただく。面倒だから。

一夏「だからって…」

霜「一夏、敗者は勝者に従え」

私は無言のプレッシャーを添えてそう告げた。

一夏「……………はい」

その後、クラス代表就任記念パーティーがあったが、やはり面倒なので途中で抜け出した事だけをお伝えしよう。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d.
.
.

7話 その青年、出撃（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。
設定の方も更新しなくては…

正直に言うと、もう一人をスザクにしたのは、

「ほう？何がおまえを強くした？」

「あんたには言いたくないね」

このやりとりがやりたかっただけです！
分かる方はわかると思いますが……

8話 その青年、懷疑（前書き）

更新しました！

今回は日常回です。

では…どうぞ。

8話 その青年、懷疑

side 筆者

前回のあらすじー。

何かセシリアが一夏に惚れて一夏が落ちてフラグを建てまくってボコボコにされました。

以上ー。

side 霜月一

………何だったんだ？今のは？

さて、今クラスはクラス対抗戦の話で盛り上がっていた。
何でも勝ったクラスには食堂のデザート半年フリーパスがでるらしい。そんな事もあったな。

皆は一夏の机の周りに群がり、勝ってくれば皆がハッピーだのそんな声がよくきこえる。

そして話は二組の転入生………名前はなんと言ったか？とりあえずその話になっていた。

さっきまで話に加わってなかったセシリアと箒も加わった。二人と

もいつ移動したんだ？

……そろそろか？

「その情報、古いよ」

入り口の前でなんとか鈴なんとかは仁王立ちしていた。人の名を覚えるのは得意ではない…。

「中国代表候補生、フ「鈴じゃないか！久しぶりだな！」ちょっと一夏！最後まで言わせなさいよ！」

ナイスだ一夏。いつも空気を読まないくせに筆者の都合に合わせてくれるとは…………

……今日の私はどうしたのだろうか？疲れが溜まっているのか？

私は現実逃避するために机に突っ伏した。

遠くで出席簿クラッシュの音がする。

織斑「霜月！起きろ！」

いや私は起きているのだが……

ひとまず出席簿クラッシュが来そうだ。

ブンッ！……バシッ！…

私は出席簿クラッシュを人差し指で抑えた。結構衝撃が来るな。痺れてしまった。

霜「調子が悪いので保健室で休んできます」

織斑「あ、ああ。わかった。次も出られないようなら連絡を入れろ」
霜「わかりました」

私は顔をあげた。見るとクラス中の隼人以外の人間が茫然としている。人差し指で止めるのはやりすぎたか？やはり親指あたりがよかったのだろうか？

私は保健室で考えていた。

クラス対抗戦：確か東博士により無人ISが送られてくる日だ：それだけならなんら問題ないのだが、なぜだか胸騒ぎがする。最悪、アリーナが消し飛ぶかも知れん：対策を練っておくか：杞憂であることを切に願いたい。

side 枢木隼人

僕は今、霜月君や一夏君たちと食堂でお昼をとっていた。

霜月君は何を考えているんだろう。それがこれから先起こることに關してなのか、別のことに關してかはわからないけど、霜月君の勘はよく当たる。

一夏君達はセカンドがどうだと言ってるし、ちょうどいい。僕は霜月君に耳打ちした。

隼「ねえねえ霜月君。これから先、なにかあるの？」

霜「…ああ、クラス対抗戦で束博士が試合中に無人機を送ってくるのだが、それ以外に何かある気がしてならない。杞憂だいいのだが…」

隼「そう…なら、手をうつておかないとね」

霜「ああ、ひとまずは社長に相談だな」

隼「うん、そうだね」

といっても、今は何も出来ないけど…

side 霜月一

放課後、私と隼人は寮の隣の部屋から聞こえるビンタの音を聞き流しフォン・ブラウンへ行った。

第七区から第八区、列車を乗り継ぎ第四区のマイホームまで戻ってきた。ここで無いと社長とコンタクトがとれないからだ。

霜「社長。今日隼人とそっちに行っていないか？少し気になることがある」

ク「分かった。22時にこちらへ来い」

短い会話を済ませ、旨を隼人へ伝えたと第三区の研究所へ行った。少し機体の調整もしなくてはいけないし、何より今ビットタイプの新兵器を開発中なのである。

ガンダムアローケルの技術がうまく生かせればいいのだが…

——22時——

私と隼人は第零区にあるフォンブラウン社の本社ビル80階の社長室に居た。何故こんなに高くする必要があるのだろうか？

霜・隼「失礼する」

私と隼人は入室した。社長は、いつもの通りイスに座っていた。

ク「来たか。用件というのは？」

霜「原作通りクラス対抗戦が行われるが、その時に襲来してくるのがただの無人機^{ゴレム}だけでは無い気がしてな。場合によっては向こうのアリーナが吹っ飛ぶかも知れないから、何か対策を立てておきたいな」

ク「……そうか。分かった。当日は一応私も『0』に乗って待機していよう」

霜「すまない。恩にきる」

ク「用はそれだけか？」

霜「ああ、では失礼した」

そう言うと、霜月はここを後にした。

さて、私の読みが当たればここに”歪み”が来るはずだが……どうなるんだ？

side out

ク「…枢木、本当にお前は何もないのか？」

隼「……この世界のことについては何もわからない。俺はここに居るべきなのか？」

ク「なに、お前の望みはちゃんとかええてやったさ。まだ時期ではない」

隼「なに？　どういうことだ？」

ク「そのうち分かる。そのうち、な」

隼「……？　…そうか、失礼した」

隼人もそう言々と部屋を後にした。

ク「さて、この世界はどう動く？」

クワトロは、誰に聞かれるでもなくそう呟き、口を笑みに歪めた。

T o b e c o n t i n u e d . . .

8話 その青年、懷疑（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。

原作キャラになかなか介入できない：

アローケルはクローケルの後付装備です。

9話 その青年、調節（前書き）

更新しました！

テスト前期間に入るため更新が若干遅れます&本編にいくのが難しくなります。

今回は本編ではないです。

では…どうぞ。

9話 その青年、調節

side 筆者

おはこんばんちわ。

前回のあらすじ

来るクラス対抗戦に向けて機体を調節する霜月であったー

一夏はビンタされたり怒らせたりしたのであったー

以上ー

side 霜月一

……最近変な電波を受信する。ニュータイプになったせいだろうか？

今日は休日。私はフォン・ブラウンの第五アリーナ、高威力兵器稼働用のアリーナに来ている。

数時間前――

研究員「君の新装備を開発するためのデータがほしいから、アローケルを使ってみてくれないか？」

霜「わかった。こちらも高威力の武装の調節をする予定だ。第五アリーナで行う。」

研「了解。アリーナ壊すなよ？」

霜「保証は出来ないな」

私は通信を切り、第二区のアリーナへ向かった。

：どうでもいいが、何故交通手段が列車しか無いのだろうか？量子転換システムを使えばいいのだと思うが、これでは時間がかかる…
今度社長に打診してみるか：

霜月は第五アリーナにつくと、クローケルを展開した。

（来い、アローケル）

霜月は、自分の右隣にガンダムアローケルを展開した。

ガンダムアローケル

クローケルの後付装備。外見はガンダムアシュタロンHCのMA形態そのもので、大型ビット兵器である。

一部動作は内蔵型A I『HALO』がサポートしているが、殆ど霜月の脳波でコントロールしている。

主な武装は両腕のギガンティックシザースと、シザースに内蔵されたシザースビームキャノン。

また、クローケルとドッキングする事によりサテライトランチャーを使用する事が出来、クローケルの追加推力としても使うことが出来る。

研「よし、では始めてくれ」

アリーナに複数のターゲットが現れた。

（行け、アローケル！）

アローケルはビームを連射しながらターゲット群に強襲した。
シザースで握り潰し、ビームを撃って落とし、ビットとは思えない
戦果を叩き出した。

霜「アローケル、ドッキング！」

H「リョウカイ！アローケル、ドッキングモード！」

アローケルはこちらに戻り、ドッキングの姿勢に入った。といっても、アローケルが乗りHALOが調整するだけなので大層な事ではない。

（同調率は上々。いける！）

霜「マイクロウェーブ、来い！」

すると、フォン・ブラウン第零区にある特殊発電施設よりマイクロウェーブが送信された。

アローケルはそれを背中のリフレクターで受信、チャージを開始した。

リフレクターが徐々に黄金色の光を放ちだす。

.....

.....

.....

〈チャージ率100%〉

その合図を確認するや、ツインサテライトキャノンの砲門を前面に、アローケルからサテライトランチャーの砲門を展開した。

霜「いっけええええ！！！！！」

へトリプルサテライトキャノン〉

その名の通り、ツインサテライトキャノンとサテライトランチャーを複合させた技である。

威力だけで言うなら、地図を変える事が出来る位の威力である。現に、ターゲットは跡形もなく消えている。

アリーナの防御壁は破壊されていない。クアトロが何かを仕掛けているらしいが、この威力を防ぐものが何なのかはわからない。

威力こそ高いが、実戦で使うにはチャージが長すぎて無理である。

もし仮にこの兵器を通常のISに使ったら、操縦者もろとも消えてなくなるだろう。それ程に強力な兵器なのである。

霜「ふむ、やはりチャージの効率を良くしなければいけないな。どうだ？データはとれたか？」

研「はい。上々です」

霜月はISを解除し、

霜「わかった。装備の完成を期待している」

そう言い残し、通信を切って去っていった。

さて、これからどうなるのか…

私の生きる意味はどこにあるのだろうか…

私はただ、歩を進めるだけであつた。

また列車に乗り損ねた。絶対に打診してくれる。

side 研究員

（アローケルを元にしたIS型の大型ビット…：サテライトシステムの搭載…）

どうしてここまで装備にこだわるのだろうか？我々の技術力は開発者である篠ノ之博士をとうに超えているのだから、そこまでする必要はあるのだろうか？

研「戦争でも起こす気なのか？それとも、戦争が起きるのか？」

私はディスプレイの中にある開発プランを見つめた。

研「I S型遠隔操作兵器” Gビット” 開発計画か……………」

T o b e c o n t i n u e d . . .

9話 その青年、調節（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。

あの研究員も出演キャラにしようかな…

10話 その青年、破砕（前書き）

更新しました！

相変わらず原作キャラとの交流がない……

では…どうぞ。

10話 その青年、破砕

side 霜月一

今日はクラス対抗戦の当日。

一組対二組の試合（一夏と鈴）が行われてる事だろう。というのも、今私と隼人はそのときに備えアリーナ外で待機している。時が来ればシールドを破壊し中に突入する。

そしてそのときはやってきた。

上空にISが接近するや、両手の巨大ビームを発射、シールドを突き破り中に入ってしまった。

霜「来たか…隼人、ハドロン砲でシールドを破れ」
隼「うん……わかった。やってやる」

私と隼人は飛翔し、ハドロン砲の発射と共に飛び込んだ。
…このアリーナのシールド、脆すぎないか？

一夏「一！隼人！どうしてここに！？」
鈴「うそ！？あれ一と隼人なの！？」

一夏と鈴がこれまで戦っていたんだったな。正直邪魔だ。

霜「お前等はさっさと後退しろ。戦力にもならない。邪魔だ」

一夏「なっ……！！もう少して教師が来る！それまで「そんな雑魚ども待つだけ無駄だろう！！」…隼人？」

どうやら隼人は早く戦いたいらしい。この隼人は本当に面倒だ。

霜「隼人。腕は私がもらう。後は好きにしろ」

隼「向こうの攻撃手段潰しちまったらつまらん！どうして腕にこだわる？」

霜「なに、あのエネルギーの充填方法が使えないかと思ってな」

そこまで言っていると隼人は頭をかき、

隼「しょうがねえな…分け前寄越せよ？」

霜「ああ。と」

霜月はまだ居た一夏と鈴を一瞥し、

霜「足が竦んで動けないなら安全な所まで行け。ウロウロされるだけ迷惑だ」

鈴「…：わかったわ。もう何も言わないわ」

ふむ、やはり我々では力不足と思っているようだな。

まあ、逆の立場なら私もそう思うか。

霜「さて、アローケル、頼む」

霜月はアローケルを展開。高速でゴーレムに突撃した。勿論、迎撃を全て回避して。

霜「取り付き、もぎ取れ」

アローケルは瞬時加速を5重発動し、背後からシザースでゴーレムの両腕を掴んだ。

少しの時間金属の軋む音になり、両腕を引き離れた。

霜「隼人、後は好きにしろ。コアに興味はない」

隼「りょーかい。さーて、やります「隼人！離れろ！」な！？」

突如、アリーナ上空から赤黒いビームがゴーレムを貫いた。

隼「あれは……ハドロン砲！？」

見ると、上空に普通のISの1.5倍はある巨大なISが滞空していた。

霜月と隼人はその名を知っている。

霜「ふむ…あれはガヴェインか？織斑先生！生徒の退避は終わってますか？」

織斑「あ、ああ。生徒の退避は終わっているぞ」

隼「そういえば織斑先生たちいたんだ……」

霜「では先生方はそこで固まっている一夏たちと共に退避してください。このアリーナは最悪消し飛びますが、後でなおします。では」

織斑「おい！しも……」

私は一方的に通信を切った。

霜「さて……始めるか。隼人、支援頼むぞ。これからソニック砲を撃つ」

隼「おうよ！任されて！」

霜月はアローケルを回収、両手を地面に差し、発射体勢に入った。隼人は突撃し、ひたすらトライデントで突いていたが、ことごとくかわされてしまう。

隼「こいつっ…！見た目の割に早い！」

……………

〈エネルギー充填率60%〉

霜「貴様にはこれだけで充分だ。地獄へ堕ちろ」

〈トリプルメガソニック砲〉

腹部より放たれた閃光は、しかしハドロン砲で相殺させられた。

（ソニック砲の相殺だど！？あのコアは調べてみたいが…無理だろう）

霜「くっ…：天気は晴れだ！マイクロウエーブ！来い！」

空にある昼間の月から、マイクロウエーブが送られる。

（やはりアリーナは消し飛ぶか…）

霜月は、深く息を吐いた。

……………

……………

〈エネルギー充填率40%〉

霜「隼人、後退しろ！ いっけええええ！！」

〈ツインサテライトキャノン〉

前面に出した砲身から光が溢れた。

対するガヴェインもハドロン砲を最大出力で放出した。

そしてアリーナが光に包まれた……

To be continued...

10話 その青年、破砕（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。

11話 その青年、追想（前書き）

しばらくの間更新出来ず、申し訳ありませんでした。
だからアレは嫌いだ……

失礼しました。では……どうぞ。

11話 その青年、追想

side 霜月一

……不味い。やりすぎた…

確かにガヴェインみたいなやつは倒した。それこそ、塵も残さず消滅させた。

なのだが……

使っていた舞台、第二アリーナは…消滅した…

霜「ふむ、40%でこれか…威力としては申し分ないが…如何なものかな？」

ISのモニターで周りを確認してみる。どうやら皆無事のようなだ。あんぐりとはしているが。

霜「織斑先生。申し訳ない。アリーナを消し飛ばしてしまった」

織斑「……………」

へんじがないが、屍と言うわけでもないだろう。山田先生含めて何人か気絶しているし。

取り敢えず、さっきから上空にいる人に声をかける。

霜「社長。降りてきても構いませんよ」

ク「ああ。しかし、派手にやったなあ」

霜「わざとでは無いんですがね。半分も出してませんし」

社長ことクアトロは、自身の専用IS《0》でこちらに降りてきた。

0

クアトロの専用機であり、世代は不明。

見た目は▽であり、髭に貫禄がある（本人談）

戦闘能力は：わからない。戦っているところを見たことがない。

ク「さーて、いっちゃやるか」

0は、上空に上がると、背中から虹色の粒子を出し始めた。

《単一能力 月光蝶》

突如、0の背中からおびただしい量の粒子が出て、アリーナのあったクレーターを包み込んだ。

月光蝶は、単一能力でありながら、《再生》、《破壊》、《防御》など、様々な用途に使うことができる、正にチートISに相応しい能力である。

数秒後、第二アリーナは何事も無かったかのようにそこにあった。

霜「あ、これ東博士作のISの腕です。研究してエネルギー充填率向上させてくださいよ」

私も何事も無かったかのように収納していたゴーレムの腕を出した。

ク「お、博士製かい。いいサンプルになるよ。ありがとう」

此方も特に気にして…する訳ないか。

霜「いえいえ、では、この埋め合わせは必ず」

ク「気にしなさんな。じゃ。」

軽い挨拶をすませた後、0は”消えた”。何でも量子転換システムを応用したらしい。今頃は月に居るんだろう。

織斑「……おい、霜月。今のは誰だ」

あ、織斑先生が我に返った。

霜「私の所属している、フォンブラウン社の社長です」

そう答えると、織斑先生はまた固まってしまった。もうソニック砲撃った事なんてどうでもいいようだ。撃った時少し焦ったんだが。

…何？撃たなければ良かった、だと？そう言われると反論出来ないではないか。あれで充分と思ったんだ。後悔しかしていない。

なんて馬鹿な事を考えつつ、学園はまた何時もの生活へ戻っていくのだった。

余談だが、この後一夏達から引かれた事は言うまでもない。

はあ、次はあの二人か…
ペアはどうするかな…

s i d e ? ? ? ? ?

ここは誰も知らない暗闇の中……

周囲には、様々な機械の部品や機器がある。

その真ん中で、ウサミミアリスは、固まっていた。

「……………」

彼女は、一夏達を鍛えるために送り込んだISを呆気なく破壊し、更に後から来た謎のISと戦闘していた様子を見ていて、漫画のよう
に目を見開いたまま固まっていた。

「何あれ…あんなのこの天才の束さん知らないよ…」

誰に聞かれるまでもなく、一人呟いた。

「あの機体、それにフォンブラウン社：調べてみる価値はあるね：」

その女性は、まだ若干顔をひきつらせながら、呟いた。

「あれじゃあ箒ちゃんの紅椿が負けちゃう：」

深い溜め息を吐くと、また黙々とISの開発に戻った。

side 霜月一

：久々に、前世の夢を見た。

今は学生寮の自室。隼人はフォン・ブラウンに戻っている。

私は、前世の死ぬ（殺される）少し前の夢を見ていた。

……

……

私は、モテなかった。それどころか、性格が災いし、高校では碌に親しい友人もいなかった。

テストはいつも下位。勉強してもあまり反映されず、虚しい日々を送っていたように今では感じる。

友人も居ることは居るのだが、いつも根暗のオタク扱いされ、正直辟易していた。

……思い返してみれば、あの日々は非常に空虚だった。

ただ学校へ行き、勉強して、帰って、勉強して、悪い点をとって親に呆れられ、勉強して………

そんな日々でも、私には高校に行く理由があった。

私は、クラスの一人に、恋をしていたのだ。

恋愛経験などなく、女性に話しかける事の出来ない私は、ただ彼女を見る事を支えに学校へ行っていた。少し思考が変態である、と今は思う。

だが、そんな日常は長く続かなかった。

彼女は、身体の具合を悪くし、転校したのである。

別に私に他人をどうこうする権利などなく、片思いの人もいなくなり、また何時もの空虚な生活に戻った。

その頃だっただろうか。こんなにやぐが頭にクリティカルヒットしたのは。

………

……

起きたら私は涙を流していた。昔を思い出したのか、あの気持ちを思い出したのか。

あの世界に未練はない。此方は結構面白い。それ故、私は思うのである。

私が此処にいる意味は何なのだろう？

ただ悪戯に人の運命を変えるイレギュラーの私が……

私は一人、再び涙を流した。

今日は休日である。あのままでいるのも嫌なので、敷地内をふらふらとしていた。織斑先生に捕まる可能性もあったが、どうでもよかった。

ふと、ハロでも作ってみるかと思われ、IS整備室を訪れた。む、中から音がするな。熱心な者も居るものだ。

取り敢えず私は中に入った。中に居たのは音を出していたその一人。髪は青色のセミロング、眼鏡をかけていて、少し近寄りたいたい雰囲気醸し出していた。

それが、私と彼女、更識簪との出逢いだった……

t o b e c o n t i n u e d . . .

11話 その青年、追想（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。

霜月に少し自分を投影してみました。霜月は変態ではないのであしからず。

レッツ、原作キャラ介入！

12話 ある少女、邂逅（前書き）

更新しました！

今回は書いている家に主人公が変わってきたので、タイトルも変えてみました。いつもより長めになっています。
では…どうぞ。

12話 ある少女、邂逅

side 霜月一

：休日に研究をするなんて思ったが、専用機を作っているのだっ
たな。

私は彼女、更識簪に軽く一礼して奥へと入った。それほど広いわけ
ではないが。

さて、技能を向上したので、当然開発能力もある。

さて、まずは本体から作るか。

side 更識簪

私がいつも通りISを作っていたら、男の人（確か一組の霜月君）
が入ってきた。

今日は休日なのに：珍しい人だな：

私は霜月君に返礼すると、また作業に戻った。

霜月君で確かとても強い人だね。機械にも強いのかな？

と思っていたと、霜月君がどこから取り出した金属板を丸く加工
していた。あんな金属板あったっけ？

つつい気になって、霜月君の手元を凝視していた。

side 霜月一

…後ろから視線を感じる。恐らく私を凝視しているのだろう。

本体は完成し、AIを作る工程に入った。

ペットタイプのハロにするつもりなので、あまり難しい回路は作らなくても良い。

回路工程に入った瞬間、後ろからのプレッシャーが強くなった。ガ
ン見してるな…

……

…よし。出来た。後はこれを本体に取り付けて……

〔ハジメマシテ、ハジメマシテ〕

霜「ああ、宜しく頼むぞ。ハロ」

〔ヨロシク、ハジメ。ヨロシク、ハジメ〕

ふう、何とか完成したな。

side 更織簪

「ヨロシク、ハジメ。ヨロシク、ハジメ」

霜月君の作った丸いボールのような機械は、そう言葉を発しながら跳ねていた。

…凄い。独立したAIで自意識を持っている…多分感情も。

それをこんな短時間で…

霜「さて…さっきからどうした？更識さん」

簪「……………いえ……………何も……………」

霜月君は此方に歩きながら私に言った。

霜「ISを作っているのだろう？姉のこともあるだろうが、誰かに頼るのも手だ」

簪「……………！……………どうしてそれを？」

霜「さあ？どうしてだろうな？只忠告しただけだ」

そう言うと、霜月君は歩いていった。

簪「……………何者？」

side 霜月一

更識簪……………

昔の私と雰囲気似ていたから声をかけてしまったが…私はまた人の運命を変えてしまったのか？

…まあ、頼られれば助けるか。

「ハジメ、ゲンキナイ。ドウシタ、ドウシタ。」
霜「さあな。どうしたんだか」

私は、今度の個人戦もといタッグマッチについて思考を巡らせていた。

隼人とは…恐らく組ませてもらえないな。
他の人は大体運命が決まっているからな。

……更識簪と組むのも悪くない、か。
まあ技術に関しては社長に相談だな。

私は、自室に向けて歩みを進めた。

その時、

「待って！」

side 更識簪

私は、霜月君を追いかけていた。

霜月君に手伝ってもらいたい。

どうしてか解らないけど、そんな思いがあった。

簪「待って！」

私は、霜月君にむかって叫んだ。こんなに声出るんだ：

霜「む、どうした？」

簪「どうして私の事情を知っているのかは知らないけど、お願い！手伝って！」

霜月君はとても驚いている。私もどうしてこんなに声がでるのかわからない。

霜「：ふむ。願ったり叶ったりだな。わかった。手伝おう」

霜月君は少し考えるような仕草をした後、そういつてくれた。

簪「本当！」

霜「ああ。だが、次の個人戦までに仕上げるぞ」

簪「うん。わかった」

早く作れるなら早いに越したことはない。

霜「さて：社長に相談だな：」

霜月君が小さな声でそう呟いた。

簪「社長？」

霜「ああ。我がフォンブラウン社の社長に相談をして研究施設を使わせてもらおうかと思ってな」

唐突に恐ろしい事を言い出した。フォンブラウン社は暗部の更識家でも調べられない存在。そんな易々と案内して良いのだろうか。

簪「……いいの？」

霜「勿論、君には黙って貰うことになる。が、IS開発が我が社の技術で出来るのだが、不満か？」

…霜月君や、もう一人の隼人君の機体を見て、技術力が凄いのはわかる。なら…

簪「……わかった…お願いします…」

霜「うむ。では明日連絡する」

私と霜月君はひとまずメアドを交換し、別れた。

…これ、お姉ちゃんには絶対に言わない方がいいよね…？

side 霜月一

霜「……………と言う訳だ」

私は今、フォン・ブラウンの自宅にて社長に例の件について報告していた。

ク「あゝいいんじゃない？もう直ぐそっちにも支社作るし」

霜「……えらく軽いな…」

ク「大丈夫だろう」

…まあ、いいか。

s i d e 更識簪

………翌日

今日は日曜日。何時もはISを作っているけど、今日は違う。

霜月君に呼び出されて、アリーナの丁度死角にいる。

会社に行くんだから、やっぱり制服の方が良かったかな…。

今私は、私服のワンピースを着ている。男の子に呼び出されるのなんて初めて…

と、霜月君がこちらに来た。少し驚いているようだ。

…ちよっと酷くないかな？

霜「悪い。待たせたか？」

簪「……ううん……今来たところ」

霜月君も私服だ。やっぱりいいのかな？

霜「さて、行くか」

うん……と言おうとしたとき、

霜月君に手を握られ、抱き寄せられた。

簪「~~~~!!／／／／」

霜「すまない。こうしないと上手く転送できないんだ。少しの辛抱だ。我慢してくれ」

何か言ってるけど聞こえない。

うう~~~~私今多分顔真っ赤だよ~~~~

霜月君、男の子なのに、いいにおい……

気がつく、私は寝かされていた。ここはどこだろう？

霜「気がついたか？」

見ると、上から霜月君が私を見下ろしていた。

簪「……ここ……どこ……？」

霜「ここか？私の自宅だが」

簪「……………／／／／」

：どうしてこんな事になっているんだろう……？

霜「どうした？具合でも悪いのか？」

簪「……うん……全然……」

霜「そうか。なら、そのクローゼットにスーツがかかっている。それを着てくれ」

霜月君が指さすと、クローゼットが”自動で”開いた。

霜「私は隣の部屋にいる。着替えたら来てくれ」

そういうと、霜月君は隣の部屋に行ってしまった。

さっきからおかしいけど…ここ、どこ？

着替えた後、私は霜月君に連れられ、外に出た。そして私は目を丸くした。

未来都市

そんな表現がぴったりだった。

流星に車は飛んでないけど、明らかに地球の技術力を超えていた。

簪「……ねえ霜月君……ここ…どこ？」

霜「うん？フォンブラウン社のある、月面都市フォン・ブラウンだか？」

簪「……へ？月面都市？」

ここ、月なの？

霜「こういう所は好きだろう？」

簪「…え？うん…でも…どうやって…」

あの短時間で月まで来る事なんて不可能だ…よね？

霜「来るときに君を抱きかかえただろう？」

簪「／／／／…うん」

霜「その時に量子転換システムでここまで来た」

簪「量子転換システム？」

霜「つまり…」

かくかくしかじか

と言う訳だ」

そんなおかしな話、信じられないけど、信じるしか無いみたい…

その後私達は電車みたいな乗り物に乗って、移動した。

霜「着いたぞ。ここが本社ビルだ」

何ともまた近未来的な…

霜「む、そういえば」

簪「…うん？…どうしたの…？」

霜月君は振り返って、私に

霜「忠告だ。私を好きになるな。碌な事にならない」

そう言った。

簪「……？それってどういう……」

霜「さて、入るか」

霜月君は踵を返してさっさと行ってしまった。

「一様にお客様。本日はどのようなご入り用でしょうか？」

霜「社長に会いに来た」

霜月君は、どこからか聞こえてきた声にそう返した。

「かしこまりました。では、転送します」

声が聞こえた後、私達はさっきとは違う場所にいた。

霜「この先が社長室だ」

簪「…今のも？」

霜「ああ。転換システムだ」

呆然としている私を軽く動かし、我に返してくれた。

霜「失礼する」

簪「…失礼します」

ロボット系のアニメでよく見る扉の先には、20代の前半に見える男の人がいた。

ク「ご苦勞、霜月。さて、ようこそフォンブラウン社へ、更識簪さん。私はクアトロ・ポイボス。当社の社長をやっている。宜しく」

簪「…更識簪です。…宜しく願います…」

クアトロさんは、椅子に深く座ると、溜め息を吐いた。

ク「早速だが、このことは口外してほしくない。守ってくれるとありがたいのだが、どうする？」

簪「…勿論、約束する」

ク「よろしい。では、後は霜月の指示に従ってくれ。霜月、いいな？」

霜「わかった」

ク「少し簪嬢と話がある。霜月、退室してくれ」

霜「？…わかった」

霜月君が出て行くと、クアトロさんは息を吐いた。

ク「簪さん。霜月の事、宜しく頼むぞ」

簪「…宜しくってどういう？」

ク「あいつは過去に苦い経験をしている。できれば彼の苦しみを解いてやってほしい」

簪「…わかった…でも、約束出来ない」

私がそう言うと、クアトロさんはクスクスと笑って、

ク「霜月の言っていた通りだ。確かに堅いな」

笑いながら私にそう言った。

その姿は、先程までの姿とは全然違って見えた。

ク「なに、君は奴の事が少し好きなのだろう？愛情を持って接してやれ」

簪「……………わかった」

クアトロさんはまだ少し笑いながら、

ク「私の話は以上だ。この都市の施設は霜月と使ってくれると有り難いな」

簪「……わかりました。失礼しました」

そう言って私も退室した。

外で霜月君は待っていてくれて、私と一緒に歩き出した。

霜「ふむ。今から研究所に行くか？それとも、もう少し見ていくか？」

簪「……研究所に行きたい」

霜「わかった」

道中他愛もない話をしながら、またあの電車みたいな物に乗り、別の所へ来た。

霜「失礼する。翼はいるか？」

翼「こんにちは。霜月さん。と、そちらの方は？」

簪「…更識簪です。」

霜「昨日話しただろう。ISを開発したいそうだ」

翼「ああ、その子か。僕は鈴峰翼だ。ここの研究所の所長をやっています。宜しくね」

霜月君より少し年上だろうか。翼さんはとてもここの所長には見えないほど若い。

翼「早速だけど、霜月君のGビット計画でベースの機体が無いんだ。少し時間がかかったけど…」

霜「その事なら心配ない。大体今の地球の四世代程度で良いよな？」
簪「…え？四世代？」

私は驚いた。だって、今世界は三代に尽力している。それなのに、霜月君は”地球の”四世代”程度”と言った。程度って……

翼「ああ、ならコア入れて一週間程度で出来ます」

霜「うむ。この位でいいか？……更識？」

この人達は……

確かコアって東博士しか作れないんじゃない？無かったっけ？しかも一週間でベースが出来るなんて……

簪「…いいの？」

霜「む？どうしてだ？」

簪「…こんな機体貰っちゃって……」

翼「こんな機体も何も、プログラムを入れるのは君だって聞いているよ？僕達は只君をサポートするだけだよ」

簪「……じゃあ……お願いします」

翼「オーライ。任されて」

翼さんは向こうに歩いていき、私の手を霜月君がとった。

霜「さて、時間があるな。私の家に行こう」

簪「／／／／……わかった」

それからまた、私達は電車で移動して、霜月君の家に戻ってきて、ソファーに座った。

霜「さて、更識はここではゲストの立ち位置だから、当然家はない。

この家を使ってくれ」

簪「…え？霜月君の…？／＼／＼」

霜「ああ。勿論配慮はする。風呂も2つ作るし、君が使う部屋には入らない。貸してるだけだからな」

どうしてだろう？少し悲しそうな顔になった。

簪「…ねえ、過去に何があったの？…力になるよ？」

霜「…無理だ。これを知ったら君はもう戻れない」

簪「霜月君に悲しい顔をされるのは嫌だ。昔、何があったの？」

どうしてこんなに話せるのかわからない。でも、身体の中に熱いものがある…。

霜「そうか…悲しい顔を私はしていたのか…昔の話は出来ない。君をこれ以上巻き込む事は出来ない」

簪「そう……」

しばしの沈黙、破ったのは私だった。

簪「……私は……霜月君の事が……好き……だから、力になりたい……だめ？」

霜「……私を慕ってくれるのは嬉しい。しかし、私はこの世界に居てはいけない存在なんだ……だから……むぐっ！」

私は、霜月君の唇に私の唇を押し付け、次の言葉を遮った。

簪「いつもの霜月君じゃない。私が近づいているのにも気付かないし、男らしくない。会ってから少ししか経ってない私が言うのも変だけど、私は何時もの私を助けてくれた霜月君が好き。今の霜月君

は霜月君じゃない。」

キスをしたことが不思議と恥ずかしくない。何かの感情が私を支配している。

簪「お願い。いつもの霜月君でいて。私を助けてくれた優しい霜月君でいて」

霜「……………いいのか？…後悔しないか？」

簪「したくないから言ってる。あなたが背負っているもの、教えて」

私は諭すように、静かにそう言った。

霜「……………この事を話すのは君が初めてだ。全て話そう」

……霜月君の口から出たのは驚くべき事だった。

自分は転生した身で、この世界はお話であること、前世で味わった苦しみなどを教えてくれた。

霜月君の雰囲気からみて嘘はついていない。

本当なんだ……。

私は、途中から涙を流していた。悲しかった。ただ、彼が背負っていた物の重さが、悲しかった。

霜「…………泣いてくれるのか。私の事で…」

簪「…………だって…悲しすぎるよ…辛かったんだね…」

霜月君は、私を優しく抱き寄せた。愛しいものを抱くように、優しく

く。

霜「……………少し、疲れた…」

そう言って、私の肩が熱くなった。私は只、彼の頭を撫でていた。

……………数分後

霜「君は……………私を受け入れてくれるのか？」

簪「…勿論。君の存在意義は私がある。私の事は簪って呼んで」

霜「簪……………私の事は一でいい。…無口よりもそっちの方が可愛いぞ」

簪「…頑張る。返事は？」

私がそう言った瞬間、彼は私の頭を手で優しく包み、

霜「…勿論、いい。君の事が好きだ…簪……………」

私と一は、ゆっくり、優しく、お互いを確かめるように、口付けをした……………

TO BE CONTINUED!

12話 ある少女、邂逅（後書き）

誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。

恋愛って…難しい…。

ひとまずヒロインは簪になりました。

隼人も誰かとくつつくよ。基本ハーレムにはしたくない。

13話 「切り札は最後までとっておくものだ」 (前書き)

更新しました！

前回は少しシリアス(?)だったので、今回はコメディに挑戦してみました。

PV20000, ユニーク4000突破しました。こんな作品を見て頂き、ありがとうございます。

では...どうぞ。

13話 「切り札は最後までとっておくものだ」

side 筆者

おはこんばんちは。

前回、存在意義を見いだした主人公。

今回の舞台はIS学園。何やら訳がありそうな二人が転入してきます。

はてさて、霜月はという風に彼女等に介入していくのか？

それでは！！ガンダ………

side 霜月一

……おい！最後まで言わせろ！

最近無かったのだが…この違和感は何なのだろう？

簪のISは今開発中である。そう言えば四世代ではいけなかったような気もするが、まあ性能の良い方が良いだろう。うむ。

…時期的にそろそろあの二人が来る頃か。

山「今日は転校生を紹介します」

…ドンピシャではないか…

教室に入ってきたのは二人の女子…いや、一人は男装中だったな。

シ「シャルル・デュノアです。宜しくお願いします」

A「…男？」

シ「はい。ここに僕と同じ境遇の方が三人居ると聴いて…」

久々に耳栓の出番だな。

隼人に目配せし、自身も耳栓をつける。この間わずか一秒。

キャーーーーー!!!!!!

…ビリビリビリ…

上から悲鳴（最早音響兵器）、窓ガラスが震える音である。

冬「静かにしろ。まだ全員終わっていない」

見ると、さっきの音響兵器でふらふらしている女子が一人。流石の大佐さんでも耐えられなかったか。

冬「ボーデウィツヒ。挨拶をしろ」

ラ「……………」

冬「ボーデウィツヒ！」

ラ「…は、はい！教官！」

ラウラは改めてこちらに向き直った。

ラ「ラウラ・ボーデウィツヒだ」

山「……ええと……以上ですか？」

ラ「以上だ」

何という素っ気なさ。この頃はただの問題児か。

ラウラは、一夏の前に来ると、手を振るった。

まあわかつていた隣の席の私は、机の上にあった本で受け止めた。

霜「初日から問題を起こすなよ」

ラ「……貴様……！」

ラウラは殺気を放ったが、痛くも痒くもない。当たり前だが。

冬「何をしている。さっさと席に着け」

ラ「……チッ」

愛しの教官を前にして何て悪い態度なんだろう。

……それこそどうでもいいか。

冬「次の授業は校庭で行う。織斑、霜月、枢木、デュノアの面倒を見る」

織斑先生は出て行き、シャルルがこちらにきた。

シ「君達が織斑一夏君と霜月一君と枢木隼人君だね？僕は……」

夏「紹介は後でいい。急ぐぞ！」

そう言うのと一夏はシャルルの手を引いて走り出した。シャルルの頬が少し朱に染まっている。隠せよ。

今、私達は廊下を疾走…するわけにはいかなないので早歩きでアリ―ナへ向かっていた。

女A「あ！織斑君発見！」

女B「しかも転校生に霜月君、枢木君も一緒だ！」

女C「皆のもの！出会え！出会えー！」

モブ女子達が現れた！

夏「くっ…逃げるぞ！」

隼「言われなくても！」

一夏達は逃げ出した！

隼「一夏！足遅い！」

女D「こっちにも居る！」

女E「こっから先は一方通行だぜエエ！」

しかし、回り込まれた！てか自重しろE！

霜「ふっ…切り札は最後までとっておくものだ」

夏「何か策があるのか？」

霜「ああ。食らえ！必殺！一夏ミサイル！」

夏「は？ってうおあ！」

霜月は一夏の背中を蹴った！

一夏は女子達に突っ込んでいった！

一夏は息絶えた…

霜月達は逃げ出した！

霜「一夏。君の犠牲、無駄にはしない」

夏「覚えてろよー！」

こうして私達は戦線を離脱した。

更衣室にて

霜「さて、一夏も居なくなった事だ。本題に入ろう」

今は着替え終わっていて、犠牲のおかげでまだ余裕もある。

シ「？あ、自己紹介の事か。僕はシャルル・デュノア。シャルルでいいよ。宜しくね」

隼「枢木隼人。隼人でいいよ。宜しくね」

霜「霜月一だ。事情は知っているから聴かんが、挙動で女子だとすぐにわかるぞ、シャルロット・デュノア」

私がそういうと、隼人は呆れたような顔になり、シャルルは心底驚いている。

隼「なんで言うのかな…僕は黙ってたのに…」

霜「黙ってれば良いという話でも無いだろう」

シ「あの…二人とも、何の話をしているの？」

隼「シャルルもシャルルだ。そんな明らかに挙動不審にしてたらハ

イそうですと言っているようなもんじゃないか」

霜「おしゃべりはここまでのようだな。急がないと手痛い裁きがくるぞ?」

そう言うと、私は駆け出した。

隼「あ、ちょっと!待ってよ!」

隼人もそれにつれて走ってきた。シャルルはまだ後ろでブツブツ言っているな……分かり易い奴だ。

結果

私と隼人は余裕で間に合った。

シャルルはギリギリセーフだったが、一夏は完全に遅刻した。そして、一夏を狙う者達（これから一夏ハンターズと呼ぼう）の中の二人、鈴とセシリアは織斑先生に手痛い裁きを食らった。

冬「本日から格闘及び射撃を含む実践訓練を開始する。今日は戦闘を実演してもらう。鳳!オルコット!」

織斑先生に指名され、鈴とセシリアは渋々前に出た。

鈴「…一夏のせい一夏のせい一夏のせい…」

セシリア「…一夏さんのせい一夏さんのせい一夏さんのせい…」

冬「…お前ら少しはやる気を出せ。あいつに良いところを見せられるぞ?」

瞬間、両者の目が光ったかと思うと、180度態度を変えた。

鈴「ここは中国代表候補生である鳳鈴音の出番よね！」

ああ、そんな名前だったか。

セ「ここはイギリス代表候補生の私の出番ですわ！」

鈴「で、誰と戦えばいいの？セシリアでもいいのよ？」

冬「慌てるな。お前たちの相手は……」

と、そこまで言った時、

山「ど、退いてくださいー！」

上空から山田先生が落ちてきた。それは真っ直ぐ一夏の元へ。

夏「え？うわわわっ！！！！！」

一どんがらがっしゃーん！！

…この擬音を考えた人は凄いと思う。

……閑話休題

一夏は落ちてきた山田先生に巻き込まれ、特殊能力ラッキースケベを発動した。

一夏の右手が、見事に山田先生の山の片方を握…もとい掴んでいた。

山「あのう…／＼／＼／＼織斑君…握りたいなら良いですけど、白昼

堂々やるのは…」

夏「うーん…てうおあ!!」

一夏は即座に飛び起きた。瞬間、一夏の頭があった所に光が通り過ぎた。

セ「あらあら、外してしまいました…次は!!」

鈴「死ねー!!」

セシリアから狙われ、鈴に双天牙月を投げられた。さらば一夏。お前のことは忘れない。(棒読み)

その時、山田先生が双天牙月を弾き、それでセシリアのビームを防いだ。普段の山田先生の姿はどこにもなく、一夏に突っ込んで壁に激突したとは思えない姿がそこにはあった。

織斑先生の話によると、山田先生は元代表候補生らしい。知っているが。

ちなみに山田先生もいつもの状態に戻っている。

冬「では、鳳とオルコットには山田先生と模擬戦闘をしてもらおう」

鈴「え? 2対1で?」

セ「大丈夫ですよ?」

冬「安心しろ。お前たちならすぐに負ける」

その言葉にカッときたのか、鈴とセシリアはすぐに戦闘態勢に入った。

冬「では、始め!」

結果は山田先生の圧勝だった。

鈴とセシリアは互いの動きを考えずにただひたすら攻撃していただけなので、たいして攻撃も当てられず落とされた。

冬「これで学園教師の力は分かっただろう。以後は敬意をもって接するように！」

一瞬私と隼人の方を見たが、どうやら止めたらしい。まあしようがないか、時間もないし。

冬「専用機持ちは……織斑、オルコット、鳳、デュノア、ボーデウイッヒ、霜月、枢木だな。では五人グループになって実習を行う。織斑、霜月、枢木のグループは六人でいいだろう。各グループリーダーは専用機持ちがやること。では分かれろ」

シャルルの所だけ六人ではないのか……人数的な問題はあるが、やはり織斑先生も気付いている？

……まあ分かっていた結果だが……

大半が織斑の所へ行き、シャルルの所にも数多く、男の中では（一部例外を含む）私が一番少ないが、それでも六人以上はいる。はあ……

冬「馬鹿者どもが……。出席番号順に各一人ずつグループに入れ！順番はさっき言ったとおりだ！次もたつくようならグラウンド百周させるぞ！」

それはまるで蜘蛛の子を散らすように、わずか数秒で整列が完了した。

ま、後は教えたり乗せたり一夏が馬鹿やったり、そんな感じだ。

昼休み

私は簪と屋上で昼食を食べていた。

あちらでは一夏とハンターズが昼食を食べている。騒々しいが気にしない。

流石に公衆の面前であり姉こと更識楯無が物陰から見ているので、至って普通に食べている。ちなみに弁当は私が作った。

簪「…うん。おいしいね」

霜「そうか。ありがとう」

未だ簪は無口のままである。普通に話している時の方が筆者としても書きやす…何を言っているのだ？私は？

霜「今日はどうする？プログラムを組み立てるのか？」

簪「…うん。もうすぐ終わりそう」

霜「そうか。なら後は向こうで組み立てるだけだな。間に合ってたかった」

ちなみに簪は今度の個人戦こと学年別トーナメントはペアになることを知っている。…なに？前に個人戦と言っていた？そんな細かいところまで覚えているわけがなからう。

簪「…あのね？一：感謝してる。ありがとう」

霜「それは完成した後と言う言葉ではないのか？」

簪「…一のおかげでとても早く完成した…。それが嬉しいの」

霜「…そうか。行事に参加できないかも知れなかったのだな？」

簪「…うん」

霜「私だって、簪が私の存在意義をくれたことにこれ以上無いほど感謝している」

簪「…たいしたこと、ない」

霜「私にとってはたいしたことだということだ。ありがとう。簪」

簪「…うん」

こうして昼休みは過ぎて行った。向こうで修羅場が発生していたが、それこそたいしたことでは無いだろう。

side 更識楯無

最近簪ちゃんが妙に明るくなったと思ったら、よく1組の霜月という男子と一緒に居るところを見る。（というか、つけている）
簪ちゃんに彼氏ができたのは喜ばしいけど…なんだかな

隼「嫉妬でも抱いているんですか？会長」

突如後ろから声をかけられ、後ろを振り返った。そこには、おなじく1組の男子、枢木君がいた。

隼「そんな化け物でも見たような目で見ないで下さいよ…傷つくなあ…」

楯「ああ、ごめん。何か用かな？」

そりゃ私の後ろをとったら驚く。更識家の17代目『楯無』なんだから、ただものではない。

霜月一と枢木隼人、それにフォンブラウン社……。更識家の力をもつてしても全くその存在が分からない……

隼「用って……物陰からものすごい嫉妬の炎を出してりや声をかけたくもなりますよ……って、聞いてます?」

彼ら、そしてフォンブラウン社というのはなんなのだろう?

隼「聞いてますかー? かいちよー?」

隼人は、楯無の耳元で優しく息を吹きかけるようにそう呟いた。

楯「ひゃん! …もう、からかうとお姉さん怒っちゃうぞ?」

考えに集中しすぎていた? 何も気配を感じなかった……

隼「だから……。霜月君に嫉妬抱いてるせいで僕を監視する回数が減ってきてるじゃないですか。おっと、そんなことじゃなかった。物陰からどす黒いオーラ出してたら怖いですよ? 会長」

楯「……気付いてたの?」

隼「そりゃあんなオーラ……ってそっちじゃないか。確かに気配の消し方は上手ですけど、まだ駄々漏れでしたよ? 霜月君だって気付いてましたし」

楯「……ねえ、あなたたち一体何者?」

隼「何者って……僕はISを操縦できる三人目の男性に不幸にも選ばれたかわいそうな男子高校生ですけど?」

楯「……そう……わかったわ。変な事聞いてごめんなさい」

隼「いえいえ、気にしてませんよ」

そうして柩木君は私と擦れ違い、

隼「…いずれわかりますから」

私の耳元でそう呟いた。

楯「どういうこと!？」

振り返ると、彼はそこにはいなかった。

…さらに興味出てきちゃったかも。

s i d e o u t

様々な思いが交錯しあった昼休み。

物語は、すでに別の方向へ動き出している…のかもしれない。

T o b e c o n t i n u e d . . .

13話 「切り札は最後までとっておくものだ」 (後書き)

次回で学年別トーナメントに入りたいな…

つくづく作家やマンガ家など、話を考える方々が凄いと感じる筆者でした…。

14話 「リミッター、解除！」（前書き）

遅くなりました…

今回も学年別トーナメント前の話です。

では…どうぞ。

14話 「リミッター、解除！」

side 霜月一

――ある日の夜

今日は向こうでやることも特にないので、寮の自室で隼人と他愛のない会話をしていた。

今隣の部屋は一夏とシャルルが同室である。そろそろバレるだろうか？

隼「霜月君？」

霜「…ああ、済まない。学年別トーナメントの事だな。言った通り今回は特に何もないだろう。多分私と隼人は一回戦で当たるからな」

隼「はあ…ニュータイプってのは便利だねえ…」

霜「いや、純粋なニュータイプではないから何とも言えんのだが…」

実際この微予知能力は怪しい物だからな。

隼「やっぱりペアはランダムかな。霜月君は更識さんと組むんでしょ？」

霜「ああ。そうなるな。だが、私と隼人が当たるならペアなど関係無かろう」

隼「…本気でやる？」

隼人は怪しい笑みを浮かべた。

霜「…ああ、単一能力か。…やってみるか？」

私も同様に笑みを浮かべた。

隼「……はあ……。やるならあらかじめ先生に言っとかないとね」
さつきまでの笑みを解き、ベッドに倒れながらそう言った。

外に出ると、一夏がいかに何かあります的な感じで自室に入って行った。今日だったのか。さて、

霜「一夏。シャルルに用がある。入れろ」

夏「え……あ……今は……ダメ」

霜「シャルルの事は知っている。隼人もつれてくるが良いか？」

夏「……ああ。変な事するなよ？」

霜「……よもや君に言われようとはな……」

出入り口で頭に？を浮かべている危険分子を無視し、隼人を呼んできた。

一夏の部屋に入ると、シャルルは驚いたような顔をした。

霜「さて……。シャルロットと呼んだ方が良いかな？」

シ「ううん。シャルルでいいよ。……ねえ？どうして知ってるの？」

隼「うーん……。シャルルの挙動が明らかに女子で、デュノア社を調べたらシャルルという名前は無く、変わりに本妻の子でないシャルロット・デュノアっていうシャルルにそっくりな女の子がいたってことでいい？」

少し考えるような仕草をした後、すらすらとそう答える隼人。上出来だ。

シ「殆ど知ってるじゃん…。僕がここに来たのは「大方社長である父親に命じられて私達の機体のデータでも取りに来たんだろ？」…
…うん」

私がすかさず言葉を被せると、視線を下に落としてしまった。やりすぎたか？

霜「で、ばれたので本国に呼び戻されるかと思ったが、学園の特記事項第二一により、少なくとも三年間は大丈夫と。合ってるか？」

夏「さっきまでの話聞いてたのか？」

霜「どこで聞けど？」

夏「あ…いや…その…」

一夏、再起動&再停止

隼「でね、シャルルはうちの会社に引き入れます。うれしい？」

シ「……へ？」

隼「君はフォンブラウン社のIS部に転属です。もう話ついてるか
ら本人の了承次第だけど」

シャルルはあんぐりとしていた。あれがギャグ絵か。

シ「どうやったの？」

霜「なに。只我が社の旧式ビット兵器の設計図の譲渡を条件にした
ら二つ返事だったぞ？」

隼「あ、イギリスのブルーティアーズみたいな粗悪品じゃ無いから
ね？」

シ「粗悪品で……。いいの？」

霜「話はあると言っている。君次第だ」

シャルルは少し考えているらしい。つまりまだ混乱しているという訳だ。

シ「じゃあ…お願いします」

隼「うん。じゃ社長にもそう言っとくよ」

私は少し考え、

霜「私達はお邪魔虫のようだな。一夏とシャルルの愛の巢にいつまでも居るわけにはいかないだろう」

そう言った瞬間、

シ「ふえっ!？」

ボンッ!!

シャルルは一瞬で真っ赤になった。因みに一夏が停止しているから言えるのだ。

隼「一夏はきついよ?ライバルは多いし、本人は超鈍感だし」

霜「夕飯を口移しで食べさせて貰えばいいのではないか?」

シ「はふふふ……」

シャルルは頭から湯気を出している。心ここにあらずのようだ。

霜、隼「ではでは、ごゆっくり(´▽｀)」

停止している一夏、ショートしているシャルル。二人を残して私達は退散した。

自室に帰ってくると、

楯「あ、お帰りなさい。ご飯にする？お風呂にする？それとも、わ・た・し？」

現生徒会長、更識楯無がいた。……はあ……。何でここに……

隼 「うーん……じゃあ会長をいただく方向で」

そう言うなり隼人はチートを使い有り得ない速さで楯無の背後に回り込んで、

楯
「ひ
ゃん
!!
/
/
/
/
/」

楯無の耳をハミハミした。力が抜けたのか、その場にへたり込んでしまった。何をしているんだお前は？

隼「やっぱりかいちよーって耳弱いんだ。」

楯 「あなたね／＼／＼／＼：ひゃん！！」

また耳をハミハミした。もう止めてやれ。おそろくライフは0だぞ？

隼「今度権限使って入ってきたらペロペロしますからね？止めて下さいよ？」

楯「……あなたには負けたわ……」

そう言いでてこうとする楯無だったが、

霜「会長。部屋に付けてった12個の盗聴器外してって下さいね？」

こんなになってもまだ探ろうとする精神に脱帽である。

霜「なあ簪。私達は健全な付き合いをしているよな…?」

簪「…他人と比べたこと無いから分からない…」

霜「…そうだな」

なんて他愛のない話をしていた。

一一一 数時間後 第二区 研究所

私の機体は、昨日渡したプログラムを組み込み調整してから後付武装を装備させてもらった。

もう完成している筈だけど…

霜「翼、私だ。簪の機体を取りに来たのだが」

翼「わかりました。少し待って下さい」

…まだこのシステムには慣れてない。当たり前かな?

しばらくすると、翼さんが床からエレベーターみたいなもので上がってきた。

翼「お待ちせしました。まずは簪さん。」もう完成している筈だけど…

霜「翼、私だ。簪の機体を取りに来たのだが」

翼「わかりました。少し待って下さい」

…まだこのシステムには慣れてない。当たり前かな?

しばらくすると、翼さんが床からエレベーターみたいなもので上がってきた。

翼「お待ちせしました。まずは簪さん。この指輪が簪さんのI S『斬鉄』です。起動テストはアリーナでおねがいします。多分一次移行はすぐに終わります。」

翼さんから綺麗なクリスタルの指輪を渡された。いつか一からも指輪を：／／／／／

霜「なぜ赤くなっている？」

簪「ふえ！？何でもないよ！？」

霜「そうか…？」

うう…恥ずかしい…。

翼「霜月さんにはこっち。エネルギー充填率の向上と、Gビットをつけておきました。」

翼さんは、一に金色のペアイヤリングを渡した。

霜「ありがとう。第5アリーナで稼働実験をする。データを頼むぞ」

翼「わかりました」

霜「さて…行くぞ、簪」

私の手を握って一が言った。

簪「一…。手…／／／／／

霜「…同じ家で生活しているのに恥ずかしいのか？」

簪「……うーん……」

そう言われると何とも言えない…。

ふと気になったので、一にどうして電車しか無いの？と聞いたら、社長のこだわりらしい。と答えた。

転送したりした方が格好いいのに…

――第5アリーナ

霜「一次移行は終わったな？これよりISの稼働実験を開始する。

簪、システムボードは画面に表示されているはずだ」

簪「……うん……。わかった」

霜「そうか。では、初めて良いぞ」

side out

開始と同時に簪はダミーをだす。

このダミーは弱いのも二世代IS級、強いのは四世代IS級らしい。今世界は三世代の試作機を作っているのだが、ここはもう四世代の量産機まで開発できている。簪が使っている斬鉄も、その量産型をベースとして作られているが、運動性はこの後出てくる篠ノ之箒専用IS『紅椿』に少し劣るぐらいである。

出した二世代IS級を近接武装『斬鉄』で”真っ二つ”にした。

この武装は、この機体唯一の基本装備の薙刀である。
そのままでもISの装甲を破壊できる威力があるが、刃の部分にビームを纏うことにより先ほどのような威力を出す。

続いて背中に展開された『春雷』から収束表示がダミーに向けて発射される。

春雷は、束製IS『ゴーレム』のビームを参考にした大型ビーム砲である。

集束と発散の両方で撃つことができ、高出力の上チャージは無いに等しい。

一通り撃った後、本命の山嵐をダミー10機に向けて一斉に放った。

山嵐は、マルチロックオンシステムを搭載した10門×10発、計100発のミサイルを同時に10機までロックオン、発射する武装である。

直撃すれば三世代ISのシールドエネルギーを0にする事ができるが、ほとんどが迎撃されてしまうので弾幕の意味合いが強い。

簪「…うん？まだ武装がある…」

簪が頼んだ武装以外に、有線式遠隔操作武器『インコム』が装備されていた。

インコムは、フォンブラウン社開発部が試験的に開発した簡易遠隔操作武装で、ビットには劣るが高い操作性と威力。高い空間認識力が必要としない汎用的な武器である。

簪「…性能高すぎ…。凄すぎる…」

一通りの武器を試し、ピットに戻った簪がそう呟いた。

霜「しかし我が社の中では量産型を強化した部類にすぎないのだが。特にインコムは試験武装だ。どのような効果を発揮するかはわからない」

簪「でも…。この展開装甲って言うものの性能もいいし…燃費がいい上に威力も高いし…。」

霜「それは汎用性の高い量産機をカスタムした機体だからな。燃費が良いに越した事はない。さて…次は私が行くか」

簪はISを解除、霜月は展開して、アリーナに入った。

翼「今回はトリプルメガソニック砲のチャージ時間を20%短縮、試作機のGビットを6機追加しました」

霜「わかった。ありがとうございます」

霜月は、左右に3機ずつGビットを展開した。

性能は四世代量産型とほぼ変わらず、操作もアローケルと同じである。

主な武装はビームライフルとビームサーベル、威力大幅低下の代わりにチャージ時間をアローケルの四分の一以下にした簡易サテライトキャノンである。

簡易式と言っても直撃すれば絶対防御を易々貫く事が出来る。

霜「ふむ、運動性は悪くないな。地球での戦闘データもあっておこる」翼「ありがとうございます。ビット兵器は稼働データが命なの

で…」

霜「わかっている。Gビット計画の為に頑張るさ。さて…こちらもやっておくか」

霜月は、ダミーを大量に出現させた。その数四世代50機。

霜「気は乗らんが…。リミッター、解除！」

《単一能力 リミッター解除》

リミッター解除

クローケルにかけられた安全装置を全て解除し、本来の姿を取り戻す能力である。が、搭乗者の事を考えられていないこのシステムは、常人ならショック死、霜月でも5分程しか保たない。

フェイスマスクの目の部分が赤くなり、右肩から真っ黒な片翼がでてくる。この羽はビットであり、計13枚ある。

霜「敵ノ破壊ヲ最優先トスル…。」

そして、アローケルに6機のGビット、13枚のウイングビットにクローケルが正宗装備で突撃した。

……

……

ものの三分でダミーは殲滅され、クローケルも元に戻った。

霜「はあっ……はあっ……。ビット操作には、問題、無いか……。」
翼「お疲れ様です。データ収集終わりました」

霜月は、ふらふらとピットに戻った。

簪「一！」

霜「大丈夫だ……。少し休ませてくれ……。」

簪「わかった。お休み」

霜「……やはり……その話し方の……方が……か……わ……い…………。」

霜月の意識は、落ちた。

いよいよ学年別トーナメントが始まる。

To be continued……

14話 「リミッター、解除！」（後書き）

時間がない……

次回は学年別トーナメント

15話 「待ち遠しかったな」 (前書き)

更新しました！

勉強が忙しい… (泣)

今回は少しキャラ崩壊が入って…今に始まった話ではない？そうです
ね…

では…どうぞ。

15話 「待ち遠しかったな」

side 霜月一

予想していた事だが、学年別トーナメントでは私達の番は回ってこなかった。

順を追っていくと、鈴とセシリアはラウラにボコボコにされて不参加。

一夏はシャルルと組み、私は簪と組んだ。隼人はランダムである。かなり女子が集まっていたのだが：

当日は一夏&シャルルペアが、ラウラ&簪ペアと当たった。

私達は偶然にも隼人達のペアと当たった。：もしかしたら偶然ではないかもしれないが：

後は原作通り、ラウラがVTシステムを発動し一夏に倒された。詳しくは原作で。

よってトーナメント及びその日の試合は中止、一回戦までは後日行う事になった。

クラス的女子が嘆いていたが、恐らく一夏と隼人の交際権でも賭けていたのだろう。私は対象外であって欲しい。私には簪が居るのだから断じてお断りである。

一夏はいつも通りラウラにフラグを建て、簪✓をへし折った。流石と言えよう。

後日の朝、シャルルが女と言うことをばらし、ラウラが一夏嫁宣言をし、クラスに真っ赤な薔薇が舞った。一夏の生命力には感心する。

そして更に後日。

遂に私達対隼人達の試合が行われた。

霜「フッフ…。待ち遠しかったな」

簪「…一…怖い…」

霜「む。失礼した」

今私と簪はピットにいる。一応作戦立てと、これからする事を教えている。

霜「まず、開始と同時に一般生のラファールを落としてくれ。その性能なら直ぐに落とせるだろう」

簪「…うん…わかった」

霜「撃破後、直ぐに後退してくれ。巻き込むわけにはいかない」

私の指示に簪は無言で頷いた。これで確認事項は大丈夫か。

霜「では、行くか」

私は射出台の上に乗った。

霜「霜月、クローケル、出る！」

どうやら向こうも同じタイミングだったようだ。私と隼人は暫く飛んだ後、降り立った。

霜「あのシステムを使うには周りに気をつけろよ」

隼「わかってるって」

互いにプライベートチャンネルで短く会話をした。その間に簪と女生徒Aは降りてきたようだ。

山「それでは、初めて下さい！」

山田先生の合図、開始のブザーと共に、簪の斬鉄から山嵐を半数射出、ラファールのシールドエネルギーを0にした。その後簪は後退、ここまで手はず通りだな。

霜「山田先生！私か隼人のシールドエネルギーが0になった時点で即刻試合を止めて下さい！勝者は残った方でいいので！お願いします！」

私はオーブンチャンネルで叫んだ。恐らく聞こえているだろう。

霜「待たせたな。始めるか」

隼「ああ。俺とお前の演舞をな！」

霜「いくぞ。リミッター、解除！」

《単一能力 リミッター解除》

隼「いくぜ！バーサーカーシステム発動！」

《単一能力 バーサーカーシステム》

バーサーカーシステム

ランスロット・トリトンの単一能力。

防御をかなぐり捨て、攻撃に徹する能力である。

機体の運動性及び武装の破壊力が上昇するが、防御力は半分以下になる。

また、操縦者の精神に直接働きかける事により、操縦者の身体能力が大幅に上昇する。

しかし、クローケルのリミッター解除と同じく操縦者の安全を考えていないシステムなので、五分が限界である。

隼人の攻撃と相性がよく、システムの効果は十二分に発揮されている。

霜「敵ノ破壊ヲ最優先トスル……」

隼「はははっ！おい！俺と戦えよ！殺り合おうぜ！俺と戦えよ！！！」

クローケルのモノアイ部分が真っ赤になり、真っ黒な片翼が生え、左右三機ずつGビットが、前方にアローケルが、上空に13枚のウイングビットが現れた。

対するランスロットは、その白い機体から真っ赤に染まり、トライデントのビームも赤みを帯びている。

そして、両者はぶつかった……

side out

セシリアは考えていた。

セ（そんな！あの数のビットをあの動きで動かしつつ自身もあんなに早く動くなんて！）

因みにセシリアの言っているビットはウイングビットの事で、Gビットやアローケルは数に入っていない。あれをビットとは思っていないからだ。

アリーナの管制室で千冬は考えていた。

千（あの動き……。霜月の周りのISはBT兵器か……。？だとしたらとんでもない並行処理能力だな……。だが、隼人もあの数を強引ではあるが凌ぎ、かつ攻撃もしている。あの二機にあの二人……。やはり……）

冷静を装っている千冬だが、内心は驚愕に満ちている。現に隣の真耶は少し涙目になっている。

千（終わったらまた呼び出さなくてはいけないな）

今はまだ試合の行く末を見守るだけである。

現在量の差も有ってか霜月が押しているが、既にGビットは全機撃墜されて量子化されている。ウイングビットも殆ど残っていない。

霜「……………」

隼「もっとだ！もっと戦えよ！」

今三分が経過したところである。両者のシールドエネルギーは残り二百を切っている。

動き出したのは霜月であった。

ウイングビットを全機収納し、正宗を取り出し、連撃を始めた。

最初こそ隼人は受け止めていたが、次第に激しい斬り合い突き合いになった。

次の瞬間、背後に回っていたアローケルがランスロットの両腕を掴み、動きを封じた。

霜「……破壊……」

霜月はそのまま腹部を展開、30%の出力でトリプルメガソニック砲を打ち込んだ。

隼人も抵抗し、背中のエナジーウイングでアローケルを破壊、離脱するも足が巻き込まれ、大幅にシールドエネルギーが減少した。

霜「……破壊……」

《八刀一閃》

息をつく間もなくランスロットに強力な連撃が襲いかかり、ランスロットのシールドエネルギーは0になった。が、霜月は攻撃を止めず、なお攻撃を加えようとしていた。

千「そこまで！勝者霜月&簪ペア！攻撃を止めろ！」

アリーナ中に千冬の声が響いた。

クローケルとランスロットが徐々に元に戻っていき、二人とも自意識を取り戻した。

霜「……終わったのか。私の、勝ち、だったよう、だな……」
隼「……ああ。負けだ。疲れたな……」

隼人はピットに、霜月も簪と共にピットへ戻った。

かくして、実質霜月対隼人の戦いは、またも霜月の勝ちで終わった。

side 霜月一

試合終了から数時間後

千「さて、お前たちに聞きたい事がある」

この構図、デジャヴだな。

霜「何でしょうか？」

千「単刀直入に聞く。お前たちは先の白騎士事件で現れた二機のパイロットか？」

隼「はい」

織斑先生から問われたのは予想していた事だったが、隼人も即答し

すぎではないか？

千「む……………」

ほら見ろ。若干困っているではないか。

千「何故あの時現れた？」

霜「社長に指示されたミッションだったので、ミサイルを全て落としました」

こうなっては私も答えるしかないな。まあ答えるつもりだったが。

千「何故？」

隼「先生もわかりませんね。あんな性能の低い東博士産の初期型じゃ全部落とせなかったでしょう？僕はミサイルを全て破壊し落下予想地点を守ったんですよ」

隼人、言い過ぎだ。

千「お前たちのISも当時は初期型では無いのか？それ以前になんてISを持っていた？」

隼「僕達の今の機体はあの時と変わってませんよ？移行はしましたが」

霜「偶然我々フォンブラウン社の作っていた兵器がISと一致したんです。我が社ももうすぐ動き出しますが」

こうでもフォローを入れておかないと危ないかもしれない。

……お前の発言もあぶねえよ！by筆者

久方ぶりの電波か……。無くなったかと思ったが……

千「……そうか。もういい。聞きたい事は終わった」

霜「わかりました。では」

隼「失礼しました」

私と隼人は、そう言って個室を後にした。

織斑先生はまだ何か言っていたが、まあいいだろう。

かくして、学年別トーナメントの一連の騒動は終わりを迎えた。

side 篠ノ之束

――少し時間を遡って

さてさて、ドイツの研究所を壊しに来た私だけ……。

あ、IS学園でVTシステムが発見されたから壊しに来たんだよう。

うん。おかしいね。

もう研究所は跡形もなかったんだ。全員無事だったけど。

ふむふむ、誰かがISで壊しに来たのかな……と思って、意味ありげに残っていた監視カメラを解析ちゅー。束さんこんな事出来るなんて凄い。

そこに写っていたのは、

”生身”で研究所を壊している少年…いや青年かな？がいた。

おかしいのは、その人の体から雷とか炎とかが出たこと。

そして、その人はカメラに向かって言った。

？「さて、コレを見てるって事は東博士かア？」

虚空に向かって話しかけるその人は端から見ればおかしな人だろう。だけど、それはこのカメラが全て意図的に残された物っていうことだよ。

？「わざわざご苦労だったなア？ここは俺が潰しといてやったぜエ？」

まだ潰れていない時に撮っているのにこんな事言ってる…。

？「まア？ご苦労さんてことで名乗ってやるよ。それが目的だからなア」

…結構高圧的な態度でムカつくね。まあ、我慢我慢。

？「俺はフォンブラウン社副社長の

進藤真人だ。

じゃな。Good-bye」

そこで彼は”消えた”。

……何者？

その場から離れて暫くたった頃、私の携帯からゴッド・ファーマーのテーマが流れた。

この状況、どうやってちーちゃんに説明しよう…。

束「も、もすもす？ 終日？」

「……………」

ぶつっ。

T o b e c o n t i n u e d . . .

15話 「待ち遠しかったな」 (後書き)

新キャラはこの後も多く出す予定。
遂にフォンブラウン社が動き出します？

16話 「束の間の平和だな」 (前書き)

まずはお詫びを。

すいませんでした。

私事からちょっと書けない状況になってしまっていたのです。今回もかなり短めです。

なかなか投稿出来なかったこと、誠に申し訳ありませんでした。

多分今月中はこれが最後だと思います。

一言

テストなんてだいつきらいだ。

では、どうぞ。

16話 「束の間の平和だな」

side 霜月一

IS学園といっても普通教科もちゃんとある。やはりシステムは普通の高校と同じだが、この学園はエリート揃い。テストなどなんてことのないものであり、水準はとても高い。

しかし二名、ほぼ強制的に入れられた者達を除くことを追記しておこう。私は大丈夫だが。

隼「なんで日本人なのに英語をやんなきゃいけないんだろう…。ISの普及によって共通語はほぼ日本語になりつつあるのに…」
一「隼人なんてまだいいじゃないか…。俺なんて何一つわからねえよ…」

現実には優しくはない。女子の中に放り込まれ周りの男子から羨望の眼差しを向けられている一夏だが、実際はとても肩身の狭い思いをしている。また、学力の差、社会から狙われたりとろくなことがない。と、持論はここまでにしておこう。

そのテストが終了した後、1年生が楽しみにしているであろう行事がある。

臨海学校

その名の通り海に2泊3日でISの訓練を主として行う行事だ。だが、これはあくまでも建て前に過ぎず、旅行の意味合いが大きい。1日目のみ自由行動で、2日目から訓練に入る。このスケジュール

で旅行と言えるのだから流石IS学園といえよう。

…今年是我々男子もいるが、女子が殺気立っているのは気のせいである。と追記しておこう。そうに決まっている。そう願いたい。はあ…。

今私は簪とともにフォンブラウン第五区の服屋に来ている。洋服などの区切りがないため、下着から宇宙服まで何でも揃っている。

ちなみに地球のほうで買わなかったのは一夏&一夏ハンターズ及び教師陣（織斑先生と山田先生。詳しくは原作で）に遭遇したくないというのが私の意見で、簪は恥ずかしいらしい。では私はどうすればいいのだろうか？

簪「…広い…」

霜「この都市に服屋は一つしかないからな。これだけ大きくなるのも仕方ないだろう」

何せこの都市の店は、東京ドームという建造物と比べると軽く数個分らしい。（社長談）なぜそんなに広いのか、どうせ浪漫だのどうだのと言うに違いない。

ジャンル毎に階層で区切られており、ナビで場所を確認出来る。子供は間違いない迷子になるだろう。

はつきりと言おう。不便である。

まあ私達のように直接出向くパターンはごくまれなので何とも言えない。

閑話休題

ひとまず私達は水着コーナーへ向かった。
私の水着など適当に買えばいいし実際そうしたが、問題は簪の水着である。

簪「……ねえ……。これ……どうかな？」

などと簪は頬を朱に染め、両手を胸のあたりでモジモジさせながら若干上目遣いでこちらを見てくる。さながら小動物のようである。

霜「……私に意見を求めるのはどうかと思うぞ？」

簪「……いいの……。一は私の彼氏だから」

霜「……彼氏だから彼女の水着を決めさせられるのか？」

簪「……」

霜「……」

実際わかったものではない。私にこんな経験はないし、筆者も……うん？何を言っているんだ、私は？

まあいい。ひとまず私は青の水着を選択した。素直に似合っていると思ったのだが、この空気のせいで冷静な判断など出来ようか、い

や、出来ない。（反語用法）

逃げるように店から出た私達だったが、店の中ですれ違った客は両手で数えられるほどであった。なので、

霜「…次からは郵送にしてくれ」

簪「…：わかった」

こうなるのも必然と言えよう。

さて、その後は第一区でのんびりくつろいでいた。詳しく言うとゲーセン（というかカジノ）、公園など色々な所に行った。流石フォン・ブラウン。地上ではお目にかかれないクオリティである。

そして今は風呂に入っている。既に時刻は夕暮れ時。湯に浸かりながら赤く染まった空を見るのも（フォンブラウン社の技術の賜物である。あの社長もたまにはいい仕事をする）いいものだ。

霜「全く。前世では考えられないな」

思えばこの世界に来てはや15年（まだ誕生日が過ぎていないため）。未だに前世の記憶を引きずっているのもどうかと思うが、今は何と恵まれていることだろうか。この平穏をいつまでも保っていたいものだ。

…この状況で考えることもないな。

今はただ、一時の平穩に体を休めるのみである。

因みに簪の入浴シーンはない。当然であろう？ わからないんだから。

すっかり夜も更けた（月面でその表現は無いだろう）ころ、私達は自宅に戻っていた。

簪「……ここって…凄いなだね…やっぱり」

霜「ああ。私も実感したよ」

今日の事を思い返しながら、他愛も無い話をしていた。

簪「…平和だね」

霜「…ああ。今の状況で考えれば、束の間の平和だがな…」

私は付け加える。

霜「この世界は余りに不安定だ。ISという強大な兵器が出来たからこそ、見せ掛けは平和になり、いつ戦争が起きても可笑しくない状況になっている」簪「…うん。私の家もISが出来てから更に忙しくなった。……お姉ちゃんともすれ違ったままだし…」

はあ、と両者深い溜め息を吐いた。

霜「辛気臭い話はこれでおしまいだ。さて、簪は何時になったら普

通になったら話してくれるようになるのかね？」

簪「…努力はしてる。でも、まだ」

霜「…そうか。なら、しょうがないな」

私は簪に向けて優しく微笑んだ。簪の頬が赤く染まる。

霜「ふむ。面白いな」

再度接近して微笑んでみた。案の定頬を赤くして俯いた。

簪「…いじわる」

小声でそう呟いたのが確かに聞こえた。

私の頬も緩んでしまう。この平穏、いつまでも続いて欲しいものだ。

To be continued...

16話 「束の間の平和だな」 (後書き)

深夜投稿&急ピッチ

誠に申し訳ありませんでした。

次回は来月になります。テストのばか。

17話 「でも、一夏が良いです」(前書き)

更新！

お詫びも兼ねて早くあげました。次回は来月って言ってたですって？ナンノコトデショウ？

今回で確実に今月最後です。はい。

では、どうぞ。

17話 「でも、一夏が良いです」

side 霜月一

：思えば何年ぶりだろうか。

今私は臨海学校の目的地、つまり海に向かっている。

前世でも引きこもっていた上に内陸県だったからな…。

フォン・ブラウンにも海（勿論人工である）はあるが、やはり自然の方がいい。

学校からバスで向かう訳だが、察しのいい方なら気付いているだろう。隣の席をめぐる問題があった。

クラス別にバスに乗っているため、4組の簪は当然いない。

私と簪の関係は既に知られているので、私の隣を無理にとる者も居なかった。

問題は一夏と隼人である。

一夏はいつもの面々に、（一夏曰わく）のほほんさんが席を取り合っていた。

隼人の方は特に特筆すべき事でもないだろう。出席簿が火を噴いた、と言っておこう。

そして…私の隣にはセシリアがいる。何てこともない。只彼女が負

けただけだ。

因みに一夏の隣にはシャルロットが座っている。それはもう幸せな表情を浮かべている。

まあ特にする事もないので寝て過ごすか……。

セ「：少し、よろしいでしょうか？」

む、まさか向こうから話しかけて来るとはな。因みに一夏のついでに原作キャラともそれなりに仲良くなっている。

霜「どうした？」

セ「学年別トーナメントの時、13もののビットみたいな物を操ってましたよね？」

：うん？13だと？

霜「いや、私が操っていたビット系武装は全部で20だが？」

セ「へ？」

霜「いや、ウイングビットが13、IS型のGビットが6、同じくIS型のアローケルで計20だ。と、聞いているか？」

セ「シリアは目を見開いたまま固まっている。私の声にようやく正気になり、

セ「わたくしもブルーティアーズを操作する身なのでわかりますが、どうやってあんな多くのビットを動かしつつ、自身も高速移動出来るのですか？」

私は暫く考え、

霜「……個人の力が大きいが、企業秘密だ」

と答えるしか無からう。セシリアも納得したようで、それから何も聞いてはこなかった。

side セシリア

……まさかあのISもどきまでビットだったなんて……。しかも黒いビット（ウイングビットだったかしら？）は高威力のビームを持っていたのに、あの複数のISもどきはビームの銃と剣を、一機だけのISはクローの部分に纏った上、撃っていましたわ……。

霜月さんのISもおびただしい量のビームを使っていました……。恐らく作成したのはフォンブラウンという企業でしょうけど、そんな企業聞いたことも無いですわ……。

……一体何なのかしら？

side 霜月一

セシリアが生徒で初めに疑問を持ったか……。

流石は首席。伊達ではないか？

まあ、考えたところで答えが見つかるわけでもない。懸念すべき事ではないな。さて、この行事では鬼が出るか蛇が出るか、非常に楽

しみである。

……気のせいか私が戦闘狂になってきていないか？

—
—
—
—
—

—
—
—
—

—
—

む、いつの間にか寝てしまったようだ。

外を見れば青々とした海が見える。久しぶりだな。

：気のせいか若干こちらの世界の海は妙に綺麗である。気のせいである事を切に願う。

バスの中は女子の声（いや奇声）で溢れている。これで起こされたのか。

……もう少し静かに出来んのか？

—
—
—
—

—
—

何はともあれ無事に宿に到着。女将に挨拶を済ませ（一夏はまた織斑先生にどつかれていた）、部屋に入った。

一夏は織斑先生と同室である。ブラコンめ。私と隼人は職員の部屋に一番近い二人部屋になった。

しかしこの宿、かなり豪勢である。国から予算が出ているらしいが、少し特待過ぎないか？まあ各国の代表とも呼べる生徒が集まっているんだ。このくらいが適切か。

なんてくだらない事を考えているうちに隼人はさっさと海へ行ってしまった。落ち着け、馬鹿者。

さて、荷物もまとめたし、私も行きますか。

部屋を後にし、海へ向かった。

出口の日陰に簪がいる。待っていてくれたのか？

霜「簪！」

簪「…一…遅い」

そう言ってぷくと頬を膨らませた。いい子だと思うと同時に、知らず知らずの間に簪の頭を撫でていた。

簪「んっ…」

目をつむり気持ちよさそうにする簪。いつからこんな小動物系になったんだ？

簪「…どうしたの？」

霜「…いや、簪が可愛いと思っていただけだ」

簪「はう…」

顔を赤くして俯く簪。いじるのもいいが、ここまでにしよう。

霜「さて…行くぞ。簪」

簪「…うん」

まだ少し赤くなっている簪とともに、脱衣所に行った。
…誤解があるかもしれないが、ちゃんと男女別れたぞ？

この空気、この暑さこそ砂浜よ。

私は黒い海パンを履いている。そこ、センスないとか言うな。

簪「…お待たせ」

こちらにトテトテと走ってきた簪は、昨日私が選んだ青の水着（余り露出度が高くないタイプ）を見事に着こなしている。

霜「いや、待ってなどいない。行くか」

簪「うん」

私達は砂浜に繰り出した。勿論ビーチサンダル装備である。

砂浜にシートを敷き、パラソルをさした。下準備はこれで良いだろう。

さて、私も海に入りますか。

一二数十分後――

……よく考えたら、この時こそ彼女と泳ぐべきではないか？簪が何も言っていないので気にしてなかったな……。

砂浜に上がり、簪の姿を探す。パラソルの所には……いない。

誰かというわけでもなさそうだ。はて？

と、岩陰で青い物が動いたのが視界に入った。

覗いてみると、そこには簪が何やら浅瀬で一人ヤドカリと戯れていた。

霜「……何をしている？」

簪「……………（っーん）」

目を合わせようとしなかった。どうやらご立腹のようである。

霜「一人でさっさと行ってしまったのは謝る。済まなかった」

簪「……………寂しかった」

それはこんな所にいればそうだろう。

簪「……今一が考えていることと違う」

何故分かった？

簪「……置いてかないで」

霜「……済まなかった」

こういう空気は苦手だ。どうすればいいのかさっぱり分からない。
と、

簪が弱々しく私の手を掴んできた。…どうすればいいんだ？

とりあえず簪の手を引っぱり、相手の腰に手を回して体に密着させた。要するに抱いたのである。女子特有の甘い香りがする。勿論周りに十分気を付けた。

簪「ひゃうっ！／＼／＼／」
ぼんっ！

おお、一瞬にして身体が真っ赤になった。未だに頭から湯気がでて
いる。当たったのか……

簪「……………ばか」

うむ、どうやらハズレだったらしい。少し涙の溜まった上目遣いで
こちらを睨んできた。

メガネっ子がメガネを外したときの威力は凄いと何かの本に書いて
あった記憶がある。今日ほどこれが正しいと思った事はないだろう。

なんて私も顔を赤くしながら簪と目を合わせていると、

簪「……………でも、許す」

そう言ってくすりと笑った。良く分からん。全く持って良く分から
ん。が、これで良いらしい。

簪「…一…そろそろ離して…」

霜「ツ：ああ。悪かった」

簪「ううん。もう良い」

全く何が良いのかさっぱりだ。が、とても幸せな時間だった。

その後は簪と泳いだり、一夏が面倒事に巻き込まれているのをみたり、ビーチバレーに参加してみたり。
平和だな。私は深く思った。

――――

――

今は夕食。やはりとんでもなく豪華な夕食だった。昼も夜も高そうな刺身がついていた。

隣には簪。とても綺麗な姿勢で食していた。やはり家柄か？

向こうでは一夏を中心に何やら騒がしくなっている。あ、シャルロットがおろした本わさの山を食べた。なんという度胸だ。案の定涙目になっているが。

一夏の隣ではセシリアが顔を真っ青にしながら正座をしている。遠目で見ても震えているのが分かる。一夏にその心が理解できる筈もないのだが。

と、キョロキョロとしていた一夏は、急にセシリアに刺身を食べさせようとした。当然女子は一斉に騒ぎ出し、我が我がと一夏の元に群がっていく。静かにしないと迷惑であろう。全く元気な奴ら：

ばん！

千「お前たちは静かに食事をする事ができるのか」

案の定織斑先生の登場である。群がっていた面々が一斉に顔を青くした。

千「どうにも、体力が有り余っているようだ。よかろう。今から砂浜をランニングしてこい。距離は……大体50キロでよかろう」

「「「いえいえいえ！とんでもないです！大人しく食事をしていきます！」「」」

そう言うなり、蜘蛛の子を散らすように散会していった。

簪「…？全然食べてない。どうしたの？」

おっと、私まで手が止まっていたな。

霜「なに、愚か者共を見ていただけだ」

私は食事を再開した。全く、無駄に時を使ってしまったな。

その後、簪、隼人と三人でこれからの事を話していた。既に簪はこの世界の歯車的なものから外れているので、話しても大丈夫らしい（やはり社長談）。

霜「さて、明日アメリカの三世代軍用IS『銀の福音』（シルバリオ・ゴスペル）が暴走する訳だが…そうだな。撃墜作戦には参加しないでおこう」

隼「どうして？」

霜「我々が参加するのは正式な作戦の時ではない。その後だ」

簪「…どういふこと？」

霜「つまり……………」

side out

霜月達が会議をしている頃

セ「ふふふ…。一夏さんにお呼ばれされてしまいましたわ…。」

嬉々として織斑姉弟の部屋に向かうのは、先ほど食事の時に部屋に呼ばれたセシリアである。

セ（喉の調子も整えておきませんと）

端から見ればかなり浮かれているのが分かる。徐々に速くなっていたセシリアは、しかし部屋の前で止まることになった。

セ「鈴さん？それに箒さん？一体どうしたんです？」

鈴「シッ！」

鈴に黙れと指示されたセシリアは、その部屋の中から千冬の喘ぎ声が聞こえて来るのが分かった。

セ「これは一体…何ですか？」

セシリアまでもが聞き耳を立てたとき、不意に襖が開いた。

三人「「へぶっ!!」「」」

思い切り、中に入ってしまった。

千「何をしているか。馬鹿者共め」

三人「「あは、あはははは……」「」」

脱兎のごとく逃げようとしたが、しかし捕まってしまった。

千「盗み聞きとは感心しないが、丁度良い。入っていけ」

話の中で、さっきの喘ぎ声は一夏のマッサージによるものであり、彼女らが考えていた事とは全く違う事が分かった。勿論、セシリアが一夏に呼ばれたのもマッサージの為である。

その後一夏は風呂に行き、部屋には千冬、箒、セシリア、鈴、呼ばれて来たシャルロットにラウラのみとなった。

千「さて、单刀直入に聞こう」

千冬は一息置き、

千「お前ら、あいつのどこが良いんだ？」

あいつとは勿論一夏の事である。

箒「わ、私は別に：以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけなので…」

鈴「あたしは、腐れ縁なだけだし…」

セ「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけです」

三人はどこか落ち着かない様子（落ち着けるわけがないが）でそう言った。

千「そうか。では一夏にそう言っておこう」

三人「」「言わなくて良いです！」「」

千冬はそれを笑い声で一蹴した。

シ「僕は：いえ、私は：優しいところ、です」

徐々に言葉がすぼんでいったのはシャルロットである。因みにまだデュノア社所属である。

千「あいつは誰にでも優しいぞ？」

シ「：そうなんですよね。それが少し悔しいかな…」

赤くなった顔を扇ぐシャルロット。続いてはラウラが答えた。

ラ「私は：強いところです」

千「いや、弱いだろう」

即答で返されてしまった。だが、

ラ「少なくとも私よりは：強いです」

そんなもんかね。と千冬はこう続けた。

千「まあ、強さ云々は置いといて、家事は一通りこなせるし、マツサージも上手い。役に立つぞ。どうだ、欲しいか？」

5人は視線を上げ、

5人「くれるんですか!？」

千「…やるか、馬鹿者共」

えー、と5人は心の中で突っ込んだ。

千「女なら自分から奪いにいくくらいの気持ちでいなくてどうする。自分を磨けよ、ガキ共」

そう言って笑う千冬は、心底楽しそうだった。

千「そもそも霜月…は駄目か。既にいるな。枢木がいるではないか。そっちは良いのか？」

不意に、そう告げた。

箒「確かに多方面で凄いのですが…」

鈴「いい男だけど…」

セ「格好いい殿方ですが…」

シ「とても優しいけど…」

ラ「私や一夏よりはるかに強いですが…」

それぞれ違う事を言ったが、最後のみはかぶった。

5人「でも、一夏が良いです」

これには流石の千冬も驚き、

千「全く…何故あいつも気付かないのか分からないな」

そう呟いた。

一同深い溜め息を吐いたのはいうまでもない。

side 枢木隼人

霜「……以上が今作戦の概要だ」

隼「しっつも〜ん。これって作戦で言えるの〜？」

霜「……………」

簪「……………（呆）」

隼「……………はぁ。分かったよ。やります」

霜月君が話した事は、ただ単にこれからの事を言っただけで、断じて作戦じゃなかった。作戦で言いたかったただけなんだろうな〜。
読者の皆さんも間違っても期待しないでね〜。

隼「でさ、ゴスペル倒した後の事は確かなの？」

霜「……ああ。今回も”歪む”だろうな」

僕は兎も角簪ちゃんはポカンとしている。説明してないのかな。

霜「簪。これが私達がここにいる事によるズレなんだ。前に言ったよな？」

簪「…うん。私はそれであなた達を否定しない」

簪ちゃんは基本めちゃくちゃいい子。あのハチャメチャ会長の妹とは思えない。

隼「ん、っ……。僕がいるんだからイチャイチャしないでね？」

ただ、場所を考えない。初だから？

霜「……こほん。後は何もなかったか？では、明日を楽しもうではないか」

隼「……ああ。」

簪「楽しむって…。まあ、いつか」

簪ちゃんも霜月君と付き合い始めてから徐々に変わってきている。

良い意味でも、悪い意味でも。

さてさて、大きな”仕事”の前は血がたぎるね。せいぜい楽しませていただきますように…かね。

side out

物語は、歪んでいく。

それが、大でも小でも、歪んでいく。

束「……えぐ……。いっくんも、箒ちゃんも、ちーちゃんも、誰も気付いてくれなかった……。……ぐす……。一日中待ったのに！」

…大小関係なく、物語は歪んでいく……。

束「いっくんのぼか……！」

それに左右される人間も、少なからず出てくる。

束「うわーん！」

T o b e c o n t i n u e d . . .

17話 「でも、一夏が良いです」 (後書き)

中途半端で止めてしまつて申し訳ないです。

アドバイス等ありましたら是非！お願い致します！

18話 「…健闘を祈る」 (前書き)

やっとテストが終わった……。

今月はちゃんと投稿します。

いつもよりも長めになっていますが、他の先生方はもっと長いんですよね…凄い。

…こほん、では、どうぞ。

18話 「：健闘を祈る」

side 枢木隼人

一一午前4時一一

隼「おはよーございませう。では、早速霜月君の寝顔を拝見しましょう。：（小声）」

今は少し空が明るくなりかけている時間帯。当然皆寝ている？寝起きレポート、やってみたかったんだよね。わくわく。

隼「では、ごはいけーん（小声）」

慎重に、かつ早く霜月君の布団をめくっていく。霜月君は、眉間にしわを寄せて寝ていた。

隼「おおー。寝顔も凛々しいですね。子供っぽかったら面白かったんですがね。：（小声）」

恐らく今日の事に関する夢でも見てるのか、不機嫌そうだった。

と、突如霜月君の体が動いた。

隼「なっ！迎撃体制に入ったと!?（小声）」

霜月君から放たれた右ストレートをかわす。寝てるんだよね？

隼「その程度の攻撃っ！（小声）」

すると、霜月君は右足で蹴り上げてきた。

僕はそれを自身の右足で抑え、続く右ストレートを両手で抑えた。

隼「これで……なっ！（小声）」

しかし、強烈な左足キックが僕のこめかみにクリティカルヒットした。

グキッ！

嫌な音と共に僕の体は壁まで飛ばされた。

隼人「…これが…ニュータイプのか…というのか…。がくっ（小声）」

そして、僕の意識は深い闇に落ちていった。

side 霜月一

――午前6時――

朝起きたら、壁の近くで隼人が泡を吹きながら寝ていた。全く、寝相の悪い奴だ。

そろそろ皆も起き始める頃だろうか。私は隼人を起こし、支度を始めた。

何やら隼人がしきりに首を押さえ、音を鳴らしている。寝違えたのだろうか？

うむ、今日もいい天気だ。この世界はいい。何かある日は大抵晴れている。昼でも夜でも月が見えないとサテライトキャノンが使えないので、非常にありがたい。

さて、今日からは訓練だったな。まあ、本日は実戦なのだが。相変わらず豪華な朝食を食べ、海岸へと出た。

――海岸にて――

今日は丸一日ISの装備試験運用とデータ取りで潰れる。どうせ実戦が控えているのでどうという事はないが、正直、めんどい。特に専用機持ちは大量の装備があるので大変だ。

千「よし。専用機持ちは全員集まったな？」

専用機持ちは一般生徒から少し離れた所に集められた。が、箒がこの集団の中に入っていた。

鈴「あの…。箒は専用機を持っていませんが…」

まあそうだな。今現在、箒は専用機を持っていない。なのに、ここにいるのはおかしいというのだろう。この後の事を知らなかったら誰だってそう思う。

千「その事なら心配ない。もうすぐ「ちーーちやゝゝゝん！
……来たか…」

頭を抱えながら溜め息をつく織斑先生の後ろを見ると、ウサミミド
レスの、不思議の国のアリスのような不思議な格好をした天災（誤
字にあらず）が砂煙を上げながら織斑先生に突撃してくる。

千「…………束」

そう。このアリスもどきの天災が、IS製作者にして箒の姉、現在
国際指名手配中の篠ノ之束である。

改めて出で立ちを見てみると、アリスが着ているような青と白のワ
ンピース、頭にはメカニックなウサミミがついている。確かあのミ
ミはかなり高性能だったはずだ…。

さて、織斑先生は臆することなく束の頭を鷲掴み、アイアンクロ
ーをお見舞いした。少し離れているここからでもギチギチという音が
聞こえる。

束「やあやあちーちゃん久しぶりだねゝ。熱い愛情表現嬉しいよゝ」
千「そうか。ならもっとやってやろう。後その名で呼ぶな」

束「分かったよちーいたいいたいギブギブ！」

織斑先生の手の甲から血管が浮き出し、ギチギチからゴキゴキにな
った。とても頭から出して良い音ではないだろう。

バキッ！

束の頭から衝撃音が鳴ったのと同様、ぴたりと動きを止めた。

山「あのゝ…。部外者は立ち入り禁止になっているんですけど…」

山田先生は多少、いやかなりビビりながらも注意したが、無駄である。その言葉に応える者は居なかった。

……しばしの沈黙

箒「……姉さん？」

すると、束のウサミミが、”ウサミミが”ピクリと動いて、

束「やあやあ箒ちゃん元気にしてたかい？」

いや何事もなかったかのように動くな。

束は箒を、いや、箒の体を見て、

束「うんうん。大丈夫そうだね。お胸がとてもげん…」

ガスッ！

どこから取り出したのか、箒は木刀をウサミミの間に叩き込んだ。

箒「殴りますよ」

箒、目が笑ってないぞ。

束「殴ってから言ったあゝ…。束さんの脳みそは二つに分かれちゃったよ？」

千「そうか。これからは二つの脳で同時に物事が考えられるな」

束「あ、そっか。さっすがちーちゃん頭いい」

こんなアホなやり取りをして親友と実妹に大きな溜め息を吐かれている束博士であるが、ISという兵器を開発した”地球上”ではとても頭のいい人間である。

束「それと…いっくん」

一「はい？」

束「ばか」

一「……………はい？」

久方ぶりの再会も済んだことだ。早く本題に入ってくれないか？

束「おお、そうだった。霜月君と隼人君。機体のデータ見せてくれるかな？」

…一応此方は企業所属で企業秘密とかもあるのだが、何を世迷い事を言っているのだろうか？

霜「すいませんが、その要望には応えられませんね。束博士」

束「あれ？天才の束さんが見てあげるって言っているんだよ？嬉しいくないの？」

…この人も根は良い人なんだが…。その考えはおかしいぞ？

霜「ええ、断固拒否ですね。我々は企業所属です。迂闊に企業秘密の塊を公開するなど出来ません」

束「おやおや、おかしい事を言うんだね。フォンブラウンなんて聞いたこともない企業の秘密なんて大した事無いだろうに」

…ふむ、少ししつこいな。後で何か旧式のデータでも与えておくか。喜んで解析するだろう。

隼「うーん……。只の世代遅れISしか作れない人に言われたく無いですね」

おい隼人、止めろ。

束「うん？私が作った篝ちゃんのISや、いっくんの白式の一部は四世代型のISだよ？」

その言葉に、私、隼人、簪以外は驚いた。

今の世界を解説しよう。

今一般生徒が使っている、いわゆる量産型のISは二世代型IS、世界が開発に躍起になっているのが三世代型ISである。セシリアや鈴達のISからも見て取れるように、まだ実験要素の高いレベルだ。

つまり、今束は世界よりも一世代上のISを開発しているのである。これだけ取れば、束がやっている事がどれだけ凄い事であるか分かるところと思うが、既に我がフォンブラウン社では四世代型は量産型である。現段階で量産にも劣る粗悪品（白式は物凄く燃費が悪い上、武器が剣しかない）を作られたところで、なんら凄みを感じない。

隼「だから、只の四世代、しかも試作型の粗悪品しか作れてませんじゃ無いですか」

阿呆かこいつは。束博士のオリジナルデータは利用できる物もある（それ程凄い物でもなく、精々性能アップに貢献出来れば良いなレベル）し、相手にすると後々面倒だぞ。

束「むむっ。私の子供を粗悪品扱いはひどいね。四世代っていったら世界最高ランクの機体だよ？そんな事も知らないのかな？」

隼「……はあ……。更識さんの機体は、僕達フオンブラウン社の最も安価の量産型四世代ISを流用した物だし、僕達の機体………」

霜「隼人、止めろ」

……この阿呆が……。我々の情報を漏らしてどうする。

私は、かなり低めのトーンで、静かに言い放った。

隼「……分かったよ」

隼人は言い争いから引き、私はひとまず熱の冷めやらない束に、

霜「……失礼しました。取り敢えず、我々の機体を見せることは出来ませんので……。どうか、お引き願いたい」

束「………」

束は不遜に思いながらも素直に引いた。

千「………んっ。束、自己紹介をしろ。一部混乱したままだ」

束「……えー、めんどくさかったよーちゃんだからその構えは止めてね？」

束の言葉に被せて織斑先生は右手を鳴らした。どうやらこうかはばつぐんだったようだ。

束「私が天才の束さんだよー。はろー。終わりー」

束が非常に平坦な声だったので、織斑先生の右手はまた鳴ったが、

やっても無駄だと判断したのだろう、右手をおろした。

他の専用機持ちや、密かに聞き耳を立てていた一般生徒は、この人がIS開発者の篠ノ之束ということに気づき、一般生徒が少し騒がしくなった。

千「お前達、手が止まっているぞ。作業を続けろ」

織斑先生の声と同時に、一斉に一般生徒が作業を再開する。本当によく訓練されたクラスだ。

箒「姉さん…頼んでいた物は……?」

箒がやっと本題を提示してくれた。ここまで長かったな。

束「おおっ、そうだったね。さあ、大空をご覧あれ!」

真っ直ぐ上を指差す束。その場にいた殆どの人間が空を見上げる。

ズドン!!

一「のわっ!?!」

展開を知っていた私はあまり驚かなかったが、いきなり上から金属の塊のようなものが落ちてきた。

落ちた衝撃で地面が揺れ、激しい砂煙により目を開けるどころか息をするのも難しくなったので、その姿を確認するのに随分時間を要した。見れば束本人もむせている。演出の仕方を考えて欲しかった。

視界も充分に確保出来るようになった頃、金属の塊からプシューという音がした。

束「…あれ？開かない…」

原作だったらすぐに開いて中身の御披露目だったのだが、どうやらさっきの衝撃でどこか壊れたらしく、いっこうに開く気配がない。

霜「…全く、貴女は阿呆ですか…」

私はクローケルを展開、どこが正面かも分からない金属の塊の壁にビームクローを突き刺し、強引に引き剥がした。どうやら正面だったらしく、綺麗に剥がすことが出来た。

束「…ああ、ありがとう」

束は四分の一感謝、四分の三嫌悪でそう答えた。妙にテンションが低かったが気にしない。

束「さてさて…。じゃじゃーん！これぞ箒ちゃん専用機こそ『紅椿』！全スペックが現行ISを上回る束さんお手製ISだよ！」

ここで一つ補足を。現行ISを上回ると言ったが、我が社の量産型四世代とオリジナル（紅椿）では、火力、敏捷性位しかオリジナル（紅椿）は上回っていない。特に燃費などは、紅椿のワンオフ・アビリティを除く通常状態では雲泥の差である。まあ、搭乗者の姉が作った専用機、しかも束博士作であるから、発揮能力は高いだろうが、所詮プロトタイプである。

因みに、私や隼人の機体とは歴然の差（しかし一部負けているところもある）であり、簪の機体も月製四世代ISをカスタマイズしたものであり、紅椿よりは基本スペックが高い箇所が多い。

ただ、現行地球製ISの中では一番スペックが高いだろう。

閑話休題

束「さあ！ 箒ちゃん、今からフィッティングとパースナライズを始めようか！（要するに箒専用にするって事ですby筆者）私が補佐するからすぐに終わるよん♪」

箒「……それでは、頼みます」

：おっと、姉妹水入らずのところ悪いか。

束はコンソールを開き指を滑らせる。さらに、6枚の空中投影ディスプレイに目配せし、同時進行で6枚呼び出したキーボードを物凄いい、しかし翼（前に出てきたフォンブラウン社開発部研究所長。覚えていた人は少ないと思う）より遅い速度で叩いていた（彼奴の指裁きは残像が見える）。普通の、いや天災の人間とチートの人間を一緒にしてはいけないか。

その間にも篠ノ之姉妹の会話は続いていた。箒は束を嫌っており、素っ気ない。が、束はそれを意に介さない様子で話している。

なんて解説しているうちにフィッティングは終わり（一夏は一次移行まで少し時間がかかったのだが、あつと言う間に終わった）、尚もキーボードを叩いている。

紅椿は、一夏の白式と同じ接近型だが、白式みたいに剣一本だけのピーキーではなく、左右に一本ずつ日本刀型ブレードがある。右の剣からは、隼人のランスロットのエナジーウイングから出るエネルギー刃のような物が出て、また、左の剣からは帯状の攻性エネルギーを展開する事により、近距離以外にも対応できるようになっている。

生徒A「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの？身内ってだけで」
生徒B「だよねえ。なんかずるいよねえ」

まあ説はもつともだが、

束「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？有史以来、世界が平等であったことなど一度もないよ」

今のこの世界では女尊男卑。その昔は男尊女卑。果ては身分制度に民族問題。人間が平等であったことなど一度もない。人間が人間である限り、平等なんていうものは有り得ないのである。

またまた閑話休題

箒は試運転として束が展開したミサイルを、左の剣『空裂』の攻性エネルギーの帯でいともあっさり破壊した。驚愕に染まりつつも、どこか新しい玩具を与えられた子供のような顔をしていた。

と、その時、

山「織斑先生！」

先程から端末を見ていた山田先生が、突然声を上げた。

ただならぬ様子だったので、織斑先生は鋭い視線を向けた。そして、千「現時点よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止。各班、ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで

自室待機する事。以上だ！」

突然の指示に辺りは騒然となる。しかし、

千「とつとと戻れ！以後、許可なく室外に出た者は我々で身柄を拘束する！いいな！」

「「「はっ、はい！」「」」

鶴の一声、有り得ないスピードで片付け始めた。

よし、これで面倒臭いデータ取りはおじゃんだ、と的外れな事を考える霜月、ついでに隼人だった。

――――

私達専用機持ちは旅館の一番奥の半作戦室（コンピュータが沢山ある。こんなに繋げて良いのだろうか）に集められた。

内容は、アメリカ・イスラエル共同開発の三代代軍用IS『銀の福音』・ゴスペルが暴走、後50分後に二キロ先の空域を通過する事がわかり、”たまたま”近くにいた我々が対処する事になった、というものである。

福音は、広域殲滅を目的とした特殊射撃型。オールレンジ攻撃が使えるらしい。格闘は未知数だが、本当は現段階では大したことはない。相手は超音速飛行を続けているため、アプローチは一回が限度、つまり一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしか方法はない。

山田先生の一撃必殺という言葉に、皆は自然と一夏の方へ顔を向ける。

鈴「一夏、あんたの零落白夜で落としなさい」

一「待ってくれ、霜月や隼人や簪さんだって一撃必殺級の武装を持っているじゃないか」

ここまでは原作通り、そして作戦通りだ。

霜「私のサテライトキャノンはチャージが長いし、単体相手に命中する確率は低い。ソニック砲にしても同様だ（本当は命中率が高いが）。簪の山嵐は全弾命中しなくてはいけないし、可能性も低い（全弾命中など容易い事だが）」

横目で隼人に視線を送る。

隼「僕のヴァリスじゃ威力不足だね。余りいい効果はないと思うよ（充分威力はあるけどね）」

千「そういう訳だ。嫌なら降りても良いぞ？」

言い方はきついが、言葉の節々に可愛い弟を気遣う様子がわかる。ブラコンめ。

一「……わかった。やります」

霜「ふむ、しかし誰かが運ばなくてはいけないな。移動中に余計なエネルギーを使うのは得策では無いだろう」

これは当然、白式の単一仕様能力『零落白夜』を完全な状態で発動させるためである。

千「お前の機体は使えないのか？」

霜「はい。アローケルは一人乗りなので」

アローケルは追加推力としても使える。まるでドダイ（ガンダムに出てくる飛行機）に乗るかのような格好で、音速を超えて飛行する事ができ、尚且つ余計なエネルギー消費をしない優れたものである。

霜「それに、アローケルから離れていては制御することが出来ません」

ただ、私の脳波で動いているため私専用である。

千「そうか。他には居ないのか？」

セ「それならブルーティアーズが。強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が本国より送られて来てますし、超高感度ハイパーセンサーもついています」

パッケージというのは、要するに換装装備である。

本人は二十時間しか超音速下での戦闘訓練をしていないらしい（十分な時間であり、単に霜月達がやりすぎているだけである）。恋する乙女は何とやらだ。

その時、

束「待った待った！その作戦はちょっと待ったなんだよ！」

と、いつの間にか天井から生えていた束の首が大声を出した。

余談だが、何故首と言う表現なのだろうか？日本語は実に不思議で

ある。

閑話休題

織斑先生に束を退去させろと命令された山田先生は、かなりオドオドしながらも束に注意したが、束は綺麗に空中一回転をしてから言葉繋げた。

束「そういう事なら、ここは断然紅椿の出番なんだよっ！」
千「なに？」

束「紅椿のスペックデータを見てみて！パッケージなんか無くても超高速機動ができるんだよ！」

織斑先生の周りに数枚のディスプレイが浮いている。全て紅椿に関するデータだが、ディスプレイが浮いているのは流石といったところか。

束「紅椿の展開装甲を調節して……。ほら！これでスピードはばっちり！」

私達を除く専用機持ちは頭に？を浮かべている。一夏、お前の白式に付いてるんだぞ。

束「説明しましょそーしましょ。展開装甲装甲というのはだね、この天才の束さんが作った第四世代ISの装備なんだよ」

まあ、そうだな。簪のISにもついてるし。

束「はい、ここで心優しい束さんがいつくんの為に解説してあげるよ。嬉しいかい？いつくん」

…説明は長いので簡略しよう。

まず第一世代は、『兵器としてのISの完成』を目標にした世代。

二世代は、『後付仕様による多様化』を目標にした世代。

三世代は、『特殊兵装の装備』を目標とした世代。

そして四世代は、『換装無しでの全領域・局面展開運用能力』を目標にした世代。つまりオールマイティーを目指した世代である。

因みに、先程隼人が言い掛けていたが、私や隼人の機体は、転生補正付きではあるが月製IS五世代にあたる。月製五世代は、『大気圏外の活動』を目標としている。つまり、私達の機体は宇宙空間でも運用でき、かつ四世代を超えるスペックを誇っている。月も大気圏外だって？気にするな。

さて、現行の地球製四世代は、一夏の『白式』と箒の『紅椿』しかない。つまり、世界中から狙われるということだ。私もオリジナルの四世代には興味があるしな。翼に見せたら…考えないでおこう。それほどまでに危険なモノを渡したのだ。正直、何を考えているのかさっぱりわからない。何とかと天災（誤字にあらず）は紙一重ということか？

閑話休題

結局、撃墜ミッションには一夏と箒が参加する事になった。原作通り、紅椿を手に入れたせいで箒はかなりハイになっている。あの状態で失敗を犯すというのはなかなか難しい事である。

…無駄だとは思うが…

霜「一夏、箒はかなりハイになっている。もしもの時は援護しろよ」

私は密かに個人通信で一夏に告げた。

一「ああ、千冬姉にも言われたよ」

霜「…健闘を祈る」

さて、帰ってくるまで暇だな…。

メンテでもしているか。空は晴れているが、少し雲が多いか？まあ懸念する事でもないだろう。

霜「…メンテナンスは先程やったじゃないか…」

誰に聞かれるでもなく、一人海岸で呟いた。

……寝るか。

side 枢木隼人

一夏と箒が任務にでている間、僕達には待機命令が出た。当たり前だけど。

僕と霜月君と簪さんは、来たるときに備えて整備を終えている。つまりはとても暇。退屈だな。

霜月君はというと、僕の隣で爆睡している。緊張感が一番無いのは

多分霜月君だろう。

どうして寝るのか聞いたら、

霜「機体の次は自分のメンテだ。備えれば憂いなしと言うからな」

といていた。

隣で寝ているって事は、即ち起こさなきゃいけない人が要る訳で、即ち僕は寝れないと言う事。…つらい。

しかし、どうして仲のいい瞼の進行を止められようか。

隼「もう無理……。お休み」

そうして、僕も眠りに落ちた。

side out

そして、霜月と隼人が爆睡している中、一夏が落ちたという衝撃的なニュースが入った……………。

To be continued…

18話 「…健闘を祈る」 (後書き)

かなりの割合で真夜中クオリティなので、誤字等有りましたら感想にてお願いします。

応援して下さいる方々に謝謝。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7432x/>

IS～Along with the memories～

2011年12月2日16時48分発行